

俑の定義

Definition of Terra-Cotta

于 保 田
U hoden

本文旨在探索“俑”字的起源，以及相关词汇的存在。通过追究长期“俑”字代名词层出不穷的原由，剖析明器、偶人、俑三者的内在联系。只有去伪存真，才能确立俑的科学定义。

目 次

- 一. 「俑」字の起源
- 二. 「俑」関係の語彙
- 三. 「俑」別称続出の起因
- 四. 明器と俑
- 五. 偶人とは
- 六. 俑の定義

一. 「俑」字の起源

孔子の言論が収録される『論語』にある俑の陳述は、初めて俑の用途を論じたものであり、古代文献の中で最も早い俑に関する発言とされている。

殷代、古いに使用された甲骨に刻まれた「俑」という文字が 100 年前に発見され、羅振玉氏撰『殷墟書契（前編）』に収録された（1913 年）。¹⁾ また翌年出版された同人撰『殷墟書契考釈』においても「俑」字は掲載されているが、俑の性質に関する解説にまでは及んでいなかった。²⁾ 羅振玉氏は大村西崖氏著『支那美術史彫塑篇』の序文において「俑」字を使用し、俑の実物が発見された範囲や時代、収集の状況などの諸問題に触れている（1917 年）。「俑」字自体の起源、およびその解釈には至っていないが、言うまでもなく羅振玉氏、大村西崖氏は「俑」字の実用化に貢献した先駆者である。³⁾ さらに羅氏の「俑」名称への愛着心が、出版した古銭などの収集に関する『俑盧日札』の書名からも伺える（1910 年）。⁴⁾

（一）形容詞、動詞の性質

殷代の「俑」字や春秋・戦国時代の孔子の「俑不仁論」⁵⁾ が発表されてから今日に至るまで名詞ということが定論であると思った人がほとんどであろう。日本、韓国などの漢字文化圏に使われる「俑」と、英語の「Mausoleum」をはじめとするローマ字文化圏の単語は、いずれも具体的にあ

る「モノ」を示す名詞類である。

しかし、意外にも早くは漢代において、「俑」字は名詞として使用されていながら、物事を描写する形容詞でもあった。後漢・許慎著『説文解字』では、「俑、痛也（俑は、痛いという意である）」と解された。この記述から考察すると、「俑」字の右半分から、この漢字の基本構成は人間が病床に臥し苦しむ様子を示しているようでもある。この陳述は形容詞として認識された最古の例である。おそらく許慎は「俑」字、「痛」字の共通部分の「甬」に注目したのであろう。⁶⁾ また、同辞書では「勇（逞しい）」という形容詞とも解釈されており、これについては「俑」、「勇」両者に同一発音があるという理由が挙げられる。

漢字の成り立ち分類である象形、指事、会意、転注、仮借、形声を検証してみる。「俑」字には象形要素がある一方で、形声字の構造も持っている。つまり「人」（人偏との「形」）と「甬」（発音）との組み合わせである。その起源の「人体」や「甬」は共に体格が良く勇ましい肉体労働者との関連性が濃厚であり、これこそが「俑」字の基点であると考えられる。

以上のように、名詞、形容詞の他に、「俑」字に含まれる動態について考察すると、動詞からの借用、転用も存在していることが分かる。こうした「俑」字の動詞との関わりにはじめて触れたのは三国時代の張揖である。張揖著『埤蒼』には「俑、木人。送葬設関、而能跳踊、故名之。（俑とは、木製の人形である。葬式用として使われ、繰ることにより、飛び跳ねることができることから、故にそれを俑という。）」と、「跳踊」の動作が名称に由来すると主張している。「俑」は人偏の「甬」、「踊」は足偏の「甬」であり、偏旁の配置構造から、「甬」字の主導的な要素が示されている。⁷⁾

このような「能跳踊」の「木人」は何物か。張揖の論述内容の裏付けとなるものが前漢時代の山東省萊西県岱墅墓から出土した。高さ193 cmの大型木製俑は四肢を動かすことができ、立ち、座り、膝を曲げるなどの機能を持っていたとされており、しばしば文献に登場する葬儀用の傀儡人との関連性が示されている。⁸⁾ 『埤蒼』の「送葬設関、而能跳踊」の「設関」とは、棒遣い、手遣い、糸操りなどの操縦であると思われる。「能跳踊」という演出類の偶人に関しては、春秋戦国・列子著『列子』、後漢・劉昭著『集注後漢』、後漢・応邵著『風俗通義』、唐・段安節著『楽府雜録』、唐・杜佑著『通典』、五代十国後晋・劉昫ら著『旧唐書』、明・劉若愚著『明宮史』に記載がある。さらに清・張玉書、陳廷敬編『康熙字典』では、「俑則設機發動、全似人、能踊躍也。音勇。（俑は動かす機関を備え、人間と似ており、飛び跳ねることができる。勇と発音する。）」とされている。⁹⁾ 発音の例として当時の人々にとっても分かりやすい「勇」字が選ばれたことは、音声が想像しやすいということに加え、意味上も接点があり実に相応しいと言える。清代初期以前においても、「俑」は既に現代と同一発音（yǒng）であったことが示唆されている。二千年の間、「俑」の発音がほぼ変わりなく、漢代の西北地域の許慎¹⁰⁾ から、清代の北方地域の張玉書、陳廷敬（音勇）に至るまでの時代、地域を問わず、「yǒng」または「yǒng」に近い発音をしており、実用的に使われなくても持続的安定性があった事が示されている。

さらに「甬」字グループには部首が違う形の似た字がある。動詞の「通」字もその一例である。「通」字は、元々、「中空または障害物の無い道路を通過する」という意味で、性質上「甬」から派生した字と思われる。自動性（湧）としても他動性（踊・通）としても、場所の変動や移動の動作を示している動詞があり、ここにも「俑」字の元である「甬」の性格の一面が示されている。このように、「俑」および「甬」には、形容詞以外に動詞との関連性もあり、我々の「俑」字認識を深め

ていくために、極めて重要な手掛かりになると思われる。

以上、「俑」字は名詞の性質を持ちながらも、形容詞および動詞とも関連がある点について触れた。そのほかに、この「甬」字が選ばれた理由、すなわち文字誕生のきっかけを考える必要がある。構造を分析してみると、言うまでも無く「俑」字の部首は人偏を持ち、人体を表すという最も基本的要素から成り立っている。「従人甬声（人偏に属し、甬と発音する）」ことから、『説文解字』では形声文字に属すると説明されており、これが適切な解析と思われる。¹¹⁾ 孔子、孟子らが俑字を使用した約 5、600 年後に、許慎の行った「俑」字が形声文字の人偏＋発音記号という形声類であるとの解説作業の意義が認められた。そうだとすれば「甬」という文字は単に発音の借用符号に過ぎず、俑字の誕生とは関連が無いのであろうか。以下、この「甬」字に、なんらかの先導的な意味が含まれていたということを考えていく。「甬」は「俑」字の九分の七の字画を占め、また「俑」との器物名よりも使用範囲が遥かに広く、甲骨文字、金文に登場する文字でもある。さらに「甬」の本質を辿っていけば、複数の重要なヒントが得られ、この「甬」字こそ、「俑」字起源問題の解決のカギとなると期待したい。

（二）「甬」字について

品詞の分類に基づいて、動詞、名詞として使われた「甬」字の用例から語義を考えてみよう。

まず動詞の機能について、「甬」は使用するという意味の「用」の代用であることが器物の銘文に示されている。初期の例として挙げられるのは殷代、山東省菏泽市収集の「宰甫卣」の「甬乍宝鼎（鼎作りに用いる）」（1952 年収集、山東省菏泽市文展館蔵）、¹²⁾ 河南省安陽県後岡出土の「戌嗣子鼎」の「甬乍父癸宝鼎。（父癸宝鼎作りに用いる。）」（1959 年、中国社会科学院考古研究所蔵）¹³⁾ であり、春秋時代、安徽省寿県朱家集李三孤堆の楚幽王墓から出土した「曾姬無恤壺」の銘文にも「甬乍宗彝尊壺、後嗣甬之。（宗彝、尊、壺を作り、後嗣子孫にも使われる。）」と記されている（1933 年）。河南省鄭県太僕郷出土の鬲式鼎の「江小仲鼎」の銘文には「江小仲母生自乍甬鬲。（江国の小仲が母の誕生日のため、自ら鬲を造る。）」とある（1953 年）。湖北省隨県曾侯乙墓からも「曾侯乙乍時甬終〔鐘〕（曾侯乙が、鐘を作る。）」という銘文をもつ鐘が出土した（1978 年）。¹⁴⁾ 以上の例のように「甬乍」または「乍甬」との語順で共に「使用する目的で作る」という意味がある。このように「用」を意味する、「甬」字の代用が早くは殷代に現れ、春秋時代まで続いていた。書物においても春秋時代成書と考えられている『尚書』から前漢時代の『礼記』まで、同様の記載が見られる。

「使用する」の意味以外に、「草木が開花する」という動態を示す場合もある。清・王筠著『説文句読』では、三国・張揖著『広雅』を引用し、「甬、草木花欲発貌。（甬とは、草木の花が咲こうとしている様子。）」と述べている。¹⁵⁾ そのほか『説文解字』の解説書として定評のある北宋・徐鉉著『徐曰』では「甬之言涌也、若泉涌出也。（甬とは涌とも言い、泉が湧き出ることである。）」と記載されていることから、「湧き出る」という意味もある。¹⁶⁾ 「甬」の字形は「人が足で地面をとんとつくこと」を表し、動詞類の性質が伺える。これは人間が横を向いた姿の輪郭線を反映している。



〔殷〕宰甫卣・山東省菏泽市

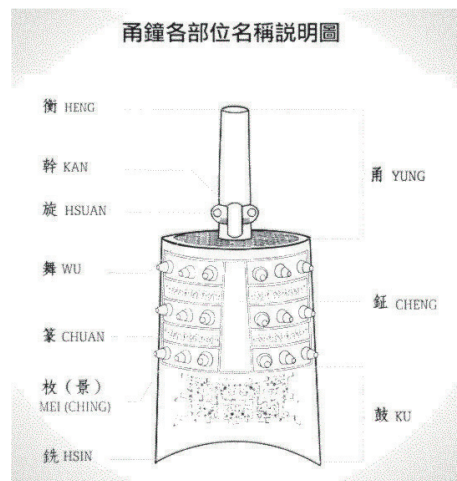


〔殷〕戌嗣子鼎・河南省安陽県

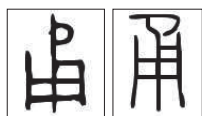
その他、許慎著『説文解字』のよれば、「草木華、甬甬然也（草木が生き生きとして咲いている）」と、副詞としての説明をしている。¹⁷⁾ 三国・張揖著『広雅』には「甬、…常也（甬は、常にである。）」と解釈されている。¹⁸⁾ 副詞の「常」は簡略化した絵文字類の性格が極めて鮮明である。「常」字の構成の内、下の部分の「吊」は吊るす、吊るされているという状態を示し、甬鐘という名詞もあることから「甬」と「常」には意味上の重なりがあったと考えられる。以上の見解はあくまでも派生的なものであると考えられる。

最初、「甬」文字は、単に具体的事物を指す象形文字の名詞として誕生したと思われる。早期の例を見ると、その文字形成の軌跡への認識の参考となるだろう。古くから「鐘」はよく「甬鐘」と呼ばれている。「鐘」字は、器物の属性（金偏）と、「童」の読みを表すという組み合わせである。この器物の形状をより具体的に表すために「甬」字の形が示す中空構造と先に述べた「吊るされている」という状態を加えた呼称である。

また「甬」は、元々鐘の一部品の名称でもあり、劉歆著『周礼』には、「甬氏爲鍾。舞上謂之甬、甬上謂之衡。（甬氏が鐘を使用する。舞の上〔の部品を〕を甬と言ひ、甬の上を衡と言う。）」と記されている。¹⁹⁾ 上部の吊手にある円形の部品「甬」が付くものを「甬鐘」と名づけた可能性もあり、その一部分の名称から器物全体まで延伸したということであろう。楊樹達氏は『積微居小学述林』において、この名称の起源に触れている。²⁰⁾ 前漢・戴聖著『礼記』に「仲春之月、日夜分、則同度量。鈞衡石、角斗甬。（仲春〔陰暦の二月〕、日夜を分けるのは、度量のはかり方と同じ。重さ、容積をはかることである。）」と記されている。²¹⁾ また『呂氏春秋』でも「斉斗甬」に触れられている。²²⁾ 鄭玄注は「甬、今斛也（甬は、即ち今の斛である。）」と述べており、「斛」とは



甬鐘名称・台湾中研院歴史語言所より



容積を量る枅や枅目のことである。その容量は約 180 リットル前後と換算される。斗と甬（また斛という）とは両方とも量器であり、量器の総称としても使われているから「甬」と「斛」、また「斗」と「斛」の間には、互いに替用する例がしばしば見られる。円筒の形状を「甬」で表したとも考えられる。秦代以前成書の『呂氏春秋』には「桶」字が既に現れている。²³⁾

「甬道」は、通る車や人が外部から見えないように、両側に土堀を高く築く建築様式の一つである。前漢・司馬遷著『史記』にも「二十七年、始皇…命信宮爲極廟、象天極。自極廟道通酈山、作甘泉前殿。筑甬道。（二十七年、始皇帝が…信宮を極廟に作らせ、天極図を象らせた。極廟から酈山まで道を貫き、甘泉の前殿を作る。甬道を筑いた。）」とあり、秦の始皇帝によって首都建設の重要なプロジェクトとして、推進されていたことが示されている。前漢・劉安著『淮南子』では「修爲牆垣、甬道相連。（城壁を造り、甬道が連なる。）」と記されている。後漢応劭の注釈では「謂築道外築牆、天子於中、外人不見也。（道を築き外側に壁を作り、天子が中に居ても、外の人が見ることはできない。）」と記載されている。²⁴⁾ 一般の道路とは異なり、甬道は両側に壁があ

り閉鎖的で明・羅貫中著『三国志演義』にも登場している。²⁵⁾ 地上の通路を指すこともあれば、また地下の墓葬の通路として、遺体、副葬品運搬のためのものとして設計され、考古学の専門用語の「墓道」の別称として使われている。

また「甬」はある特定の身分を示す言葉でもある。これは、我々の「甬」の語意の範囲に対する認識をいっそう広げることができ、「甬」、「俑」両文字の内在的関連性について啓発が与えられるものである。前漢・楊雄撰、東晉・郭璞注『方言』は前漢からの地域ごとの呼称の差異をまとめている書物である。それによれば「臧、甬、侮、獲、奴婢賤称也。荊淮海岱雜齊之間、罵奴曰臧、罵婢曰獲。齊之北鄙、燕之北郊、凡民男而婿婢謂之臧、女而婦奴謂之獲、亡奴謂之臧、亡婢謂之獲。皆異方罵奴婢之醜称也。自関而東、陳魏宋楚之間、保庸謂之甬。(臧、甬、侮、獲はいずれも、奴婢の賤称である。荊〔湖北〕、淮〔江蘇〕、海岱と雜齊〔山東〕の間では、奴を臧と罵り、婢を獲と罵る。齊の北鄙〔北方の僻地〕、燕〔河北〕の北郊では、大凡、庶民の男が婢の婿となるのを臧と言ひ、女が奴の嫁になると獲と言う。死亡した奴を臧と言ひ、死亡した婢を獲と言う。すべてある地方での奴婢への蔑称で、貶める呼び方である。函谷関から東の陳、魏、宋、楚の間では、保庸を甬と呼ぶ。)」とある。²⁶⁾ 上記の文献に示されるように「函谷関以東」の地域では保庸の別称として「甬」を使う。



函谷関と陳、魏、宋、楚等諸侯国の位置関係図

「保庸」とは身分が低い肉体労働者のことを指していた。前漢・司馬遷著『史記』でも保庸という名称に触れている。「相如身自著犢鼻褌、與保庸雜作、滌器於市中。(司馬相如が自作の犢鼻褌〔陰部を覆う布〕を穿き、保庸と共に様々な雑務労働をして、市場の中で器を洗う。)」²⁷⁾ 犢鼻褌を穿き力仕事をする労働者の姿は山東省沂南県北寨村の画像石にも表れている(1954年)。労役を意味する「庸」「傭」は長く併用、代用され、より字画の少ない「庸」が採用されたのと同様に「甬」「俑」においては「甬」が採用された。人偏を加えることで人間の意味をより明確にしたと考えられる。



〔漢〕山東省沂南県・画像石

傭、保傭、庸はいずれも身分の低い人間への呼称である。また『史記』には傭に関して、「(樂布) 窮困、賃傭於齊、爲酒家保。(樂布は窮困し、齊地の人に雇われ、酒屋の給仕人となる。)」と記されている。その注釈には「酒家作保傭也。(酒屋で働く者を保傭と言う。)」とあり、²⁸⁾ 同『史記』の中では、「條侯子爲父買工官尚方甲楯五百被、可以葬者。取庸苦之。(條侯の子が父のために、工官の尚方が扱う葬式の爲の鎧、盾など、五百組を買った。これを侍従に取りに行かせた。)」という記載もある。²⁹⁾ また、「庸」は

労役を指す言葉としても長く使われた。戦国・商鞅著『商君書』では、「令有甬官食概、不可以辟役。(労役を統轄する官吏から食糧が支給されれば、役が義務付けられる。)」とあり、³⁰⁾ 高亨氏注「甬、傭也、役也。(甬は、傭と役である。)」と記されている。³¹⁾ 租税制度である「租庸調」は、北周から唐まで実施された。「庸」には「賃金を支払う」という意味があり、現代中国においてもお手伝いさんのことを「傭(佣)人」と呼んでいる。³²⁾ 上述のように、後漢・許慎著『説文解字』では形容詞の類に属するものとして、「傭」を「勇」と説明している。「甬」に「力」という文字構成からも、低い身分の甬が力仕事をするという意味がある。文字の総合的な性質を上手く掌握しており、「勇」字は、傭の発音に借用されたのみならず、字形や意味が重なるところがある。

春秋時代成書と思われる『尚書』には「時甲子昧爽、王朝至于商郊牧野、乃誓。王左杖黄鉞、右秉白旄以麾、曰、『…及庸、蜀、羌、髳、微、盧、彭、濮人。稱爾戈、比爾干、立爾矛、予其誓』。(二月甲子の頃、早朝に、武王は商都郊外の牧野で誓った。武王は左に黄色い飾りの鉞を立て、右に白い旄を執り、曰く『…、庸、蜀、羌、髳、微、盧、彭、濮の人々よ、戈をあげよ。盾をならべよ。矛を立てよ、私が誓うぞ。』)」と記載されている。民に暴虐せしめる殷王朝の紂を討伐する牧野の誓いは、庸を含む各地の氏族への呼びかけである。因みに「庸」は身分である一方、前述の『方言』に書かれている地名「函谷関から東の陳、魏、宋、楚の間」との関連もある。その所在地は後世の「中原」(河南省)と呼ばれる区域である。庸は蜀、羌などと同じく地名から氏族名に転用されたとも考えられる。³³⁾

(三)「甬」から「傭」へ

「傭」字は「人」字から人体彫刻品に属す性格が示され、左側の「人」編と右側の「甬」が補い合う性格を持つが、字音、字義の上で大部分を占めるにはのは右側の「甬」である。「玟(文王)」、「珣(武王)」などの字例のように一字で二文字を表す合成の性質があると言える。長い間、「甬」と「傭」両字が並存していても「傭」字の起源は「甬」にあることが明白である。

器物の「甬」鐘、建築の「甬」道、またほとんどの陶製、金属製傭は共に中空構造となっている。さらに傭使用の初期、その表現対象の大半は、身分の低い労役者であった。これらは「庸」、「傭」の奴隷、捕虜、農民、辺境民族などで、いずれも下層階級の人をモデルにして造られた。「甬」という字が延伸するのもごく自然なことであり、また理に沿う考えである。これらのことは「甬」は「庸」、「傭」と諧音の関係あるという事にも反映されている。さらに「甬」の字画が少なく、借用しやすいということも傭という派生語が誕生した理由と考えられる。



〔殷〕河南省安陽県（殷墟 YH358）・奴隸傭

どんな文字を選ぶかという理由の一つは、まず語意への適応性であって、その次は表示しやすさであろう。表示しやすさと平行するのは読みやすさであると思われる。文字が読めない庶民層にとって「甬」、「庸」、「傭」を同一視した可能性が極めて高い。彼らにとってどの字(符号)で表すかは重要でなく、この yōng という読み方で選択をしていた可能性が高い。

一般的に発音が先行し、その後、知識層が文字で定着させるという流れは「甬」も「傭」も例外ではなかったのだろう。

また、地域性という角度から見ると、先述の「保庸（傭）」が「甬」と呼ばれていた場所「函谷関から東の陳、魏、宋、楚の間」は、黄河中流域の現在で言う河南省辺りの範囲で、俑使用の先行地域であった。この地域は「傭」呼称の発生、定着の地である可能性が他地域と比べて大きい。殷代から春秋・戦国時代に至るまでの捕虜、奴隷または下層民を表す傭は、「保庸（傭）」の具現化である。

今の段階では、最も早く「傭」という言葉を使用した人物は孔子と認定されており、孔子の発言から「傭」字起源に関して間接的にヒントが与えられている。「君子」を自負する孔子による下層階級の「民」つまり「小人」への立場表明として、「小人」を労働者が多く教養が欠ける者と表現している。「君子和而不同、小人同而不和。（君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず。）」、³⁴⁾「君子喩於義、小人喩於利。（君子は義に喩り、小人は利に喩る。）」、³⁵⁾特に「未有小人而仁者也。（いまだ小人にして仁なる者あらざるなり。）」という表現は、品性に欠けた低俗な人間の小人でありながら仁徳を備えた者をいまだ見たことがないということである。³⁶⁾



〔戦国〕 河南省信陽県・奴隸傭

春秋・戦国時代において、「小人」とされるのは労働民、奴隷、捕虜、夷蛮族であり、下層労働者の「保庸（傭）」類は小人集団の主力である。それらをモデルとして作られた傭はかなりの割合を占めている。「傭」字の由来、そして表現対象の共通性は無視できない。さらに後漢・班固著『漢書』の広陵厲王劉胥による「辞世の賦」には、「蒿里召兮郭門閭、死不得取代庸、身自逝。（蒿里〔死者の山〕に招かれ、死門〔墓室の入口〕を通過し、死とは金を払っても代ってもらえず、自らが逝くものである。）」と記載されている。唐・顔師古注には「言死当自去、不如他徭役得顧庸自代也。（言わば死にあたり自らが去っていくはずだ、徭役のように代わりに他人を雇うのとは違う。）」と記されている。³⁷⁾ 少なくとも6～700年の長い間「庸」字の内包する意味は、身分の低い階層労役者を指すことがはっきりしていた。

二．「傭」関係の語彙

（一）「偶」字関連名称

「傭」字が登場するようになって、傭歴史の初期はもちろん、隆盛期の秦、漢そして唐時代にいたるまで埋葬用の人体類を指す使用例が全く見られない現象は誠に不思議である。長い間「傭」字の代わりに複数の名称が使われており、その中で最も多いのは「偶人」である。偶人と呼ばれるものを検証すると、確かに傭の中身と一致するものがある。しかし、偶人はそのすべてが埋葬用の人体型彫刻品の傭であるとは限らない。その点については後述にて使い分けを明確にしていく。孔子の「傭発言」が一般的に知られるようになって、なぜ「偶人」をはじめとする言葉が頻繁に使われたのかという疑問の解明は、傭研究において避けては通れない課題である。

【偶人】

「偶人」はあらゆる人体型彫刻品を指し、概括範囲が広く、その中でどれが傭の定義と一致するのかという点を吟味する必要がある。前漢・劉安著『淮南子』には、「魯以偶人葬、而孔子嘆。（魯国で偶人を以て副葬を行うことに、孔子が嘆息した。）」との文章が見られるが、これは明らかに埋葬用の偶人で傭である。³⁸⁾ ここで注目すべきことは、劉安は著作の中で孔子の名を用いながら、

『論語』にある俑という用語が登場していないということである。おそらく漢代の人々の理解を得るため、社会において既に広く知られていた偶人という分かりやすい言葉を選用了と考えられる。前漢時代から清朝末期に至るまで2000年の間、「俑」という言葉が全く不案内であり、「偶人」という言葉を使い、説明する方が有効であったという背景が存在したのであろう。

以下は各時代の「偶人」使用の代表例である。

後漢・班固著『漢書』には、「古人用以事神及送死皆木偶人、木偶馬。(古人が神への祭祀をし、死者を送る際に用いるのは、すべて木製偶人、木製偶馬であった。)」と記載されている。³⁹⁾ 副葬品の偶車馬、木偶人、木偶馬について、後漢・王符著『潜夫論』では、「今京師貴戚、郡県豪家、生不極養、死乃崇葬、或至離金鐘玉、…多埋珍宝、偶人車馬。造起大塚、広種松柏廬舎祠堂、務從崇上僭。(今日都の王侯貴族、郡県の豪族たちは、生前極めて栄華な生活を送り、死後も人目を引く葬儀を行なわぬ者はない。〔彼らの用いた品々は、〕いずれも金を施し、玉を鏤めたもの、…多くの珍宝や偶人及び車や馬の模型が埋葬される。大規模な墓の周囲には、松柏を植え、また草廬や祖廟を建造するなど僭越な埋葬が行なわれている。)」と当時の厚葬の風潮を批判している。⁴⁰⁾ この埋葬用の偶人は、俑の性質を具える墓用の人体彫刻品である。

南朝の宋・范曄著『後漢書』には、「有宦者趙忠喪父、帰葬安平、僭為瓊璠、玉匣、偶人。(宦官の趙忠という人が父を葬り、安平郡へ帰葬させ、密かに瓊璠〔玉器装飾品〕、玉匣、偶人を陪葬する。)」という記載があり、⁴¹⁾ 五代の後晋・劉昫も「王公百官競為厚葬、偶人象馬、彫飾如生、徒以眩耀路人…望王公以下、送葬明器、皆依令式、並沈於墓所、不得衝路昇行。(王公貴族及び身分の高い役人は競って厚葬を行い、偶人や明器の馬を作り、生きているかのように装飾してこれを見せびらかす…王公貴族へ、副葬用の明器は法律に従い、皆墓に埋葬すべきで、それらを担いで街中を練り歩くなどしてはならない。)」と記している。⁴²⁾ 「送葬明器」類の「偶人」、「象馬」とあり、間違いなく今の常用語の俑と馬彫刻類の事である。

北宋・李昉編『太平御覧』の中の「俑」という項目にも「俑、偶人也(俑とは偶人である)」とされている。また、李昉と同時代の蘇軾著『東坡志林』では「詩云、穀則異室、死則同穴。古今之葬皆為一室。獨蜀人為一墳而異藏、其間為通道、高不及肩、広不容人。生者之室、謂之壽堂、以偶人被甲執戈、謂之壽神以守之、而以石瓮塞其通道。(『詩経』曰く、生きているときは部屋を別々にし、死後は同じ墓に埋葬すべきであると記載されている。今も昔も埋葬は同じ墓だが、四川の人だけ一つの墳墓に異なる部屋を設け、その間に通路を造り、高さは肩まで及ばず、広さは人が通れないくらい。生者の住まい、いわゆる壽堂の様に、偶人に鎧甲を被せて戈を持たせ、壽神と呼んで墓室を守らせ、さらに石瓮で通路を塞ぐ。)」とされている。⁴³⁾ 「被甲執戈」の「偶人」は守備の類の兵士俑、または武士俑である。

以上のように、劉安、王符、范曄、劉昫、李昉、蘇軾らの言った「偶人」は明らかにその全てが埋葬用の人像で、俑と重なる実例である。しかしその反面、副葬品の人体彫刻品とは全く関わりが無いものもあり、それらは射撃類、玩具類などに分類される。

【土偶人】

前漢・劉向編『戦国策』には、以下の「寓話」のような記載が見られる。「蘇代謂孟嘗君曰、今臣来、過於淄上。有土偶人、〔與桃梗〕相與語。桃梗謂土偶人曰、子西岸之土也。挺子以爲人。至歲八月、降雨下、淄水至、則汝殘矣。土偶曰、不然、吾西岸之土也、〔吾殘〕則復西岸耳。今子東国之桃梗也。刻削子以爲人。降雨下、淄水至、則子漂漂者、將如何耳。(蘇代は孟嘗君に言った。このほど、臣がお館に行く途中、湛水のほとりを通りかかると、泥人形と桃の木の人形が互いに語り合っていた。桃の木の人形が泥人形に言うには、『君は元をたどれば、この西岸の土だ。君は搜ね固めて人間らしく作られてはいるが、毎年八月の頃ともなり、大雨が降って淄水が溢れ出したら、折角の君も元の木阿弥だ』すると泥人形が言い返し、『いや、そうではない。いかにも、僕は西岸の土だ。しかし、僕が壊れたら、西岸に帰るだけのこと。だが、君は、東国の桃の木で作られている人形だ。君を刻んだり削ったりして人間の形につくられてはあるが、大雨が降り、淄水が溢れ、君を流したならば、ぷかぷか漂い流れる君は、どうするつもりかね。』)」⁴⁴⁾

これは土偶人と木偶人(桃梗)を擬人化した描写である。双方の言い争いの内容からは、土、木それぞれの彫刻手法への賛否、いわば素材による芸術形式の優劣の論争に過ぎないと考えられる。⁴⁵⁾ 先学からのある程度の啓発が与えられるが、単にそれぞれの材質の良さを自賛する寓話の主人公を「俑」と断言できるであろうか。何より「土偶人、桃梗」の彫刻品が埋葬関係の俑と結びつく手掛かりが示されていない。「俑」と判定する前提として、欠かせない条件は墓に関連するかどうかであるが、この物語の中では一言も直接、あるいは間接的に触れられていないのである。

近、現代になっても、日本の学者らは依然として「土偶」という用語を多く使ってきた。例えば、明治四十二(1909)年、鳥居龍藏氏は、遼寧省旅順市老鉄山にて陶俑の頭部を発見したことについて、美術史雑誌『国華』に文章を発表し、出土品を土偶と呼んでいる。⁴⁶⁾ 昭和二十二(1947)年、小林太市郎氏著の『漢唐古俗と明器土偶』は書名に土偶とある。⁴⁷⁾ 同一の現象は中国の学者の間にもあり、「俑」の名称を復活させた羅振玉氏さえも、同一対象を土偶とも述べている。氏の日本滞在中の1915年4月、大村西崖氏著『支那美術史彫塑篇』の序文に、「俑の発現は、東は扶桑から、西は弱水流域にまで及ぶ。これまでに出土した俑の内、隋および唐の俑が最古である。関中地域では、兩漢時代のものが見られるが、漢以前のものは発見されていない。中州での短期滞在中、山西省において初めて、三代〔夏、殷、周〕の土俑を収集した。また衛輝では陶甗一点および鴉尊二点出土した。土偶は漳濱曹瞞の墓とされる場所から出土したと伝えられている。⁴⁸⁾ これにより、古代の明器は三代から兩漢、さらに六朝を経て、唐、宋代に至るまで観察が可能となった。」とある通りである。⁴⁹⁾

【木偶人】

後漢・班固著『漢書』の「古人用以事神及送死、皆木偶人、木偶馬。(古人が神を祭り、死者を送ることに、全て木製偶人、木製偶馬を用いる。)」は、今の段階では最も古い「木偶人」表現の使用例である。⁵⁰⁾ その後、南朝の宋・謝靈運著『祭古冢文并序』では「埤蒼曰、俑、木送人葬也。(埤蒼曰く、俑は、埋葬用の木製品である。)」とされている。また、「俑或爲偶。偶、刻木以像人形。(俑はまたは偶と言う。偶は、木を彫った人形である。)」と、木素材の加工品であることに触れて

いる。⁵¹⁾

唐代、新疆吐魯番市トルファン哈喇和卓カラホーゾ墓からも木製俑が複数発見されている。例えば、75TK99号墓の男性俑の上半身には、「奴白頭内」という漢字が墨で書かれている。同墓ではまた「代人」と記された木製牌17枚が出土しており、もう一種漢字以外の文字については「ソグド文字と似ているが解読できない」と発掘報告書に書かれている。文字が描かれた人像是太眉に大きな目、また八字形の髭が付いている特徴から見て、中央アジア民族の可能性があると同報告書で推測されている。⁵²⁾ 随意に字や絵を施すことができ、材料が豊富で簡単な加工によって製作できるのは木製偶人の良さであり、各時代において広範囲に渡り使用されている。

(二)「人」字関連名称(人+～)群

【人】

「偶人」の「偶」字が省略され、「人」のみの使用で俑を指す例もある。偶人の「偶」字は人偏であり、人間の意味が元々含まれている。おそらく一種の省略でありながらも、直接「人」を使うことで、対象となる人間がより直観視される効果もあったと思われる。「この猫は我が家の次男」という、動物を擬人化するのと類似点がある。器物の一種である俑を「人」とし、言いやすく分かりやすい言葉を選択したという他に、あたかも実在の人間のように記述して、親近感を持たせたのであろう。

前漢時代の湖南省長沙市馬王堆1号墓の竹簡の遺策には、「美人四人、二人楚服、二人漢服」と記されている(1972年)。⁵³⁾ 同馬王堆3号墓出土の竹簡の遺策にも「牛、牛車各十、豎十人」、「輶車一輛、牛一、豎一人」と記されている。ここでいう「豎」とは子どもを指す言葉である。⁵⁴⁾ 前漢の湖北省江陵鳳凰山168号墓の遺策にも、「牛車一輛、豎一人、大奴」、「从馬男子四人、大奴」、「美人女子十人、大婢」、「養女子四人、大婢」、「田者男女」、「人卅一、船一」とある。⁵⁵⁾ いずれも死者を送る副葬用の牛車の模型や俑、そしてそれぞれの数量を示している。遺策に記載された数量が実際の俑などと一致するののかについて、盗掘されなかった墓の信憑性のある発掘結果を分析したところ、必ずしも遺策の記録に当てはまる数の牛車の模型、俑が安置されていないことから、その数量は一種の象徴的意味であることが明らかとなった。後漢時代の甘肅省武威市雷台墓からは銅製乗馬儀仗隊列の俑、馬車、奔馬彫刻などが出土した(1969年)。注目すべきは銅製馬体に刻まれた「冀張君騎一匹、牽馬奴一人。冀張君夫人騎一匹、牽馬奴一人。冀張君小車馬、御奴一人。」という記載である。「牽馬奴」は馬を牽く者を指し、「御奴」が御者を指す言葉として使用されている。「冀張君騎」、「冀張君夫人騎」の「騎」とは「(誰々の)乗用馬」という意味合いである。⁵⁶⁾ 「馬」の「匹」に対し、「牽馬奴」、「御奴」に当てはまるのがこの「人」で、当然、名詞ではなく前例同様の助数詞である。このような助数詞の呼称が、金、元時代の人物と思われる張景文著『大漢原陵秘葬經』の「盟器神煞」篇にも多く見られることに関して以下に詳しく述べることにする。⁵⁷⁾

河南省鞏県で出土した唐代陶俑は、九体の軀体に墨書で職名が書かれている。それらには「力士、執硯、従命、奉舌、春花、芳樹、益智、善来、(顔?)容」などがあり、「力士、執硯、従命、奉舌」は、守衛と書案関係の侍従だろう。また「益智、善来、(顔?)容、春花、芳樹」は侍従者の名前で、益智、善来が男性、他は女性であろう(1957年、河南省博物院と鞏県文化館蔵)。⁵⁸⁾

【人形】

南朝の宋・謝靈運著『祭古冢文并序』には、非常にリアルに発見現場の状況が記録されている。「元嘉七年、恵連為司徒彭城王義康法曹参军。義康脩東府城、城塹中得古冢、為之改葬、…明器之属、材瓦銅漆、有数十種、多異形、不可尽識。刻木為人、長三尺、可有二十余頭、初開見、悉是人形、以物^{chén gǔ bō}根撥之、応手灰滅。(元嘉七〔430〕年、〔族弟の〕恵連が司徒彭城王の劉義康の法曹、参军となる。義康が東府城を修復する際、城塹〔城の周囲にめぐらした堀〕の中から古墳が発見され、これを改葬し…明器は陶、銅、漆などの素材のものが数十種類があり、多くは異なる形で、一部しか識別できない。木を彫り人の形にしたものは、長さは三尺で二十体余りあり、開けてみただけ、いずれも人形も、棒で動かすと崩れてしまった。)」⁵⁹⁾

「以物根撥之、応手灰滅」とは、空気が墓に入ったため、しばらくして俑が風化したものであろうか。元々品質の良くない木製俑が、保存環境、葬具の密閉性が悪かったために劣化したと考えられる。謝靈運の俑研究への貢献は、上記の詳細な記録のみならず、同『祭古冢文并序』には「撫俑生哀（俑を触り悲しみが生じる）」という実物の俑に関連する記述もあった。

（三）「人」字関連名称（～＋人）群

【象人】

韓非子（前 280 年～前 233 年）は、『顕学』に下記の見解を述べている。「盤石千里、不可謂富。象人百万、不可謂強。石非不大、数非不衆也、而不可謂富強者。盤石不生粟、象人不可使距敵也。（大岩ばかりが何千里に渡りあったとしても、富裕とは言えず、人形の兵隊が何百万人いても、強い力量とは言えない。岩石が大きくとも、また人形数が多くとも、富裕、強力と言えないのは、大岩は穀物を生じず、人形は敵に対抗できないからだ。）」とある。⁶⁰⁾ 長い間、学界ではこの「百万」は単に文学的な描写に過ぎないと重要視されてこなかった。湯池氏はこの説を引用し、「戦国時代晩期において、盛んに偶人が作られていた事が十分理解できる」との意見を示している。⁶¹⁾ 陝西省臨潼兵馬俑は秦の始皇帝のものでないと主張する陳景元氏も賛成し、さらに兵馬俑との関連性を具体化させようとしている。俑が象人に含まれているという点は、その延長線上に位置付けることは可能であっても、象人の全てに俑との代替関係が成り立つかについては疑問が残っている。

後漢・班固著『漢書』には、「常従倡三十人、常従象人四人。（常に俳優としては三十人、象人としては四人ついている。）」と記載されている。⁶²⁾ 顔師古の注釈では、孟康説を引用し「象人、若今戲魚獅子者也。（象人とは、今の魚や獅子の調教師に扮する者である。）」としており、面具を被った仮面芸人を指すとも考えられる。現段階では一か所で最も多いとされる臨潼県秦代兵馬俑の数さえも一万足らずであり、象人を何百万人と表すのは誇張的喩えに過ぎず、数える意味合いはなかったと思われる。

『周礼』では「及葬、言鸞車象人。（葬具といえば、鸞車、象人とのことを指す。）」と記されており、林尹の注には「象人、以木刻為人而能跳踊者、以其象人故名。用以送葬。（象人は、木を彫り人の形とし、飛び跳ねて踊ることができ、人間と似ているからこの名が付いた。これを用いて副葬をする。）」と書かれている。⁶³⁾ 俑の別称として使われた「象人」について、『孟子』には「仲尼曰、始作俑者、其無後乎、為其象人而用之也。（仲尼曰く、始めて俑を作った者に、跡継ぎが居ないのは、

人をかたどった物を用いたからである。）」とあり、「人に喩えて造る」ものであったとしている。⁶⁴⁾ このように「象人」の象は、元々何々に扮する、または何々と似ているという動詞としての使用例がある一方、また名詞化される事例も多くある。

清・焦循著『孟子正義』に「俑則能転動象生人、以其象生人、故即名象人。『塚人』之象人、即俑之名也。(俑は人のように動くことができ、生きている人間に似せることから、象人と名付けられる。『塚人』は象人即ち俑の名である。)」とある。戦国・莊子著『莊子』には「当是時、猶象人也。(この時、[列御寇の]表情は人形のようなのである。)」とあり、唐代成玄英の注には、「象人、木偶、土梗人也。(象人は、木製、陶製の偶人なり。)」とある。⁶⁵⁾ 清・周寿昌著『漢書注校補』では、「象人、即孟子所云為其象人而用之也。但彼以木俑、此以人象耳、如楚優孟著令尹衣冠為孫叔敖之類。(象人とは、即ち孟子の言うところの人をかたどってこれを用いるものである。ただこれらの人間を象った木製の俑は、人間を真似たに過ぎず、楚の俳優の優孟が亡き大臣孫叔敖^{そんしゅくごう}の着物、冠を身につけるようなことである。)」との記載がある。⁶⁶⁾

これと関連のあるのは、劉昫の「偶人象馬」である。「象馬」は「象人」と同じく動物の象の意味ではない。ときには、「像人」、「相人」などの言葉も使われている。おそらく字形、発音も相似しているために、使用されたものであろう。

【^{こうり ろうじん}嵩里老人】

嵩里老人の「嵩里」(または蒿里)は、山東省泰山とつながっている高里山の「高里」の転用である。高里山は泰山と同様に死者の靈魂が宿る聖地とされ、漢代から「あの世」の代名詞として使われるようになった。漢の武帝の子である広陵王劉胥は、かつて死に直面した際、「嵩里招兮郭門閼、死不得取代庸身自逝」⁶⁷⁾ という詩文を作り、唐代の顔師古は「蒿里、死人里。(蒿里とは、死人の里である。)」と注釈した。⁶⁸⁾ また、三国・曹操著『蒿里行』で、「白骨露於野、千里無雞鳴。(白骨は野にさらされ、四方千里の鶏は鳴かなくなった。)」と戦乱の世の悲惨さや、村落が死者で溢れ、荒れ果てた窮状を訴えている。⁶⁹⁾ 晋代陸機の詩文でも「梁父亦有館、蒿里亦有亭。(梁父山にも館あり、蒿里山にも亭あり。)」と冥府に施設があることに触れている。⁷⁰⁾ 漢代から晋代あたりに作られたとされる『蒿里曲』の歌詞は「蒿里誰家地、聚斂魂魄無賢愚。(この荒れ果てた蒿里は、誰の地なのか。集めて、埋められた魂、魄に賢愚の差は無い。)」である。⁷¹⁾ また、学術界においては清・羅振玉氏の『蒿里遺珍』に墓葬から出土した珍宝が収録されている。⁷²⁾ 陝西省西安市和平門外雁塔東で発見された陶製瓶に朱で書かれた「買地券」式文書からは、後漢初平四(193)年、王氏妻の黄夫人の子が母親の地下での安泰を祈った内容が伺える。「慈告丘丞莫伯(柏)地下二千石蒿里君莫(墓)黄…謹奉黄金千斤兩、用填(鎮)塚門地下死籍。(慈しみを込めて、丘丞墓伯柏や地下二千石の蒿里君墓黄へ申し上げる…謹んで黄金の千斤兩を差し上げ、それを用いて地下の死籍を守らんことを願う。)」とあり、「蒿里君」という擬人化した名称がある(1957年)。⁷³⁾ 晋・陶淵明著『祭程氏妹文』には「死如有知、相見蒿里。(あの世で知覚があれば、蒿里で再会できる。)」という追悼文が記載されている。⁷⁴⁾ 北宋・高承著『事物紀原』には、「今喪葬家、於墳中置桐人、有仰視俯聽、乃蒿里老人之類。(喪主が墓穴に桐製偶人を安置し、仰視伏聽というものがある、蒿里老人の類である。)」と記されている。⁷⁵⁾ 清・徐松編『宋会要輯稿』では、永定陵の明器に「蒿里老人」と記載されているとある。⁷⁶⁾ また、張景文著『秘葬經』にも、墓の「蒿里老人」

が西北方角に置かれると書かれている。⁷⁷⁾「蒿里老人」と称される人像彫刻も発見されている。南唐時代の南京市祖堂山李昇陵^{べん}の後墓室では、両手を胸前に合わせた老人像が発見されており、「蒿里老人」類ではないかと思われる。⁷⁸⁾日本で開催された『敦煌・西夏王国展』の図録にも西夏時代の甘肅省武威市2号墓で発見された「蒿里老人」の彩絵木版画が収録されている(1988年出展)。⁷⁹⁾以上は「蒿里老人」が俑と関わりを持つ例である。

【桐人】

春秋時代の魯国第二十七代君主である哀公(生年不詳―前467年)が父を弔った後、「桐人」を用意するか否かに関する魯哀公と孔子の対話の中で、哀公は桐人の使用に対する態度が示されている。北宋・李昉編『太平御覽』⁸⁰⁾、清・俞樾著『茶香室叢鈔』⁸¹⁾では、それぞれ三国時代、魏・王肅著『喪服要記』を引用している。「虞卿、…知有過、作桐人。(虞卿は、…過ちを知り、桐人を作った。)」とある。その原因は、「遇惡繼母、不得養父、死不得葬。(惡徳な繼母の存在により、〔虞卿は〕父を養えず、また死に及んでも、丁重に弔うことができなかった。)」ことにあるとしている。自らの親不孝を悔いる目的で使用した事例もある桐人に対し哀公は、「吾父生得供養、何用桐人為。(私の父親は生前養われていたにもかかわらず、何故桐人を使うか。)」と述べた。桐で偶人を作ることで、死者への自責の思いを表現する、誠に興味深い話である。

上記にも触れた後漢・許慎著『説文解字』に、「偶、桐人也。(偶とは桐で作られた人形である。)」という記述が見られる。⁸²⁾後漢・劉安著、高誘注『淮南子』でも、「偶人、桐人也。(偶人は桐人である。)」と解釈されている。⁸³⁾許慎の論述との表現の違いは、許の「偶」に対して劉、高の「偶人」のみである。遡ると、前漢・桓寬著『塩鉄論』においては「古者、…桐馬偶人彌祭、…桐人衣紬^{やう}綈^{ぎん}。 (昔、…桐馬、偶人は祭祀に用いられ…桐人は華美な衣服を着用する。)」などの記載も見られる。⁸⁴⁾「桐馬偶人彌祭」、そして「桐人衣紬綈」という記載から見て前漢時代において既に幅広く桐製の馬彫刻や俑が使用され、しかも華麗な服装をさせる工夫がなされたことが分かる。俑造りでは衣服が一体化したものが多いのに対し、陝西省咸陽市渭城区正陽鎮張家湾陽陵の陶製裸体俑(1990年～現在も発掘されている)の胴体に衣服を着せるという工法もあったことが文献、実物に示されている。

北宋・高承著『事物紀原』に「今喪葬家、於墳中置桐人。(現在、喪主が墓穴に桐製偶人を安置している。)」と記載されている。⁸⁵⁾さらに清・張玉書編『佩文韻府』⁸⁶⁾において引用された、後漢・袁康編『越絶書』⁸⁷⁾には「桐不為器用、但為偶。(桐は器具としては使用できないが、偶人〔俑〕の材料に利用できる。)」とある。埋葬用素材として、後漢・班固著『白虎通徳論』では、『礼記』で「桐」を取り上げ、「桐者、痛也。(桐とは痛みを意味する。)」と述べている。「痛也」は、遺族の「心の苦しみ、痛み」が表されていると考えられる。⁸⁸⁾『説文解字』の「偶、桐人也」に関し、清・朱駿聲著『説文通訓定声』には、「本作桐人也。桐、相形近而誤、相人者、像人也。一名俑。(桐人として作られた。桐と相の字形が近いので間違えられ、相人とは、人と相似するという意味である。また俑ともいう。)」とある。⁸⁹⁾「桐人」と言っても全て埋葬に関係があるわけではない。北宋・李昉著『太平御覽』には「江充為桐人、長尺、以針刺其腹、埋太子宫中(江充は桐人を使い、長さは一尺で、針でその腹部を刺し、太子宫の中に埋める。)」と記されるように、呪術の道具を指すこともある。⁹⁰⁾黄河、揚子江下流地域は、桐の木が幅広く分布し、採取しやすいという利便性が

ら俑また、「江充桐人」の材料として選ばれたとも考えられる。

【鉛人】

後漢時代の河南省靈宝県張湾墓の器物に「謹以鉛人金玉、為死者解適、生人除罪過。(謹んで鉛製の偶人、金、玉を用い、死者のために流言から解消し、生きる者が罪を取り除く。)」という内容が刻まれている(1972年)。「適」という文字は「謫」と通用しており、解適(謫)とは流言飛語を払い、死者の埋葬地での安泰を願うとの意味もあると思われる。⁹¹⁾ 郭沫若氏著『奴隸制時代』では、鎮墓文の「上党人參九枚欲持代生人、鉛人持代死人。(上党人參九本を生きる者〔遺族〕の代わりに持たせ、死者の代わりに鉛の偶人に持たせる。)」という記載を引用している。⁹²⁾

同時代の陝西省長安県三里村墓の発掘資料は、「故以自代鉛人。鉛人池池、能春能炊、上車能御、把筆能書。(だからこそ、生きる人間の代わりに鉛人を用いる。鉛人は多数あり、米つきや煮炊きができ、馬車を操ることができ、筆記ができる。)」と詳しく鉛人の役割について記している。⁹³⁾ これら鉛人を使うことで、地下世界での安泰や死者への奉仕を願った。これは一種の死者に対する地下対策とも言え、俑の元来の役割でもある。鉛人の役割や表現は、人体彫刻品の埋葬用の俑の性質を十分に持っており、鉛製俑と言っても差し支えない。この類の発見は極めて少なく、戦国時代早期の河南省洛陽市中州路第2717号墓の跪く男性俑(1954年、故宮博物院蔵)、⁹⁴⁾ 戦国時代中期の河南省洛陽市中州路北側第131号墓の跪く男性俑などの四体(1981年)が初期の代表例である。⁹⁵⁾ 鉛人俑の素材については、鉛の成分が大半で、他の微量の金属が含まれるとされており、『説文解字』では、鉛は「青金也(青色の金属である)」と認識され、実際には「青灰色」という方がより相応しい。⁹⁶⁾

【執役人】

北宋・王溥編『五代会要』には「執役人高不過一尺。其余音声隊馬威儀之属、各準平生品秩所司、仍以木瓦為之、不得過七寸及別加画飾。(執役偶人は高さ一尺未満とする。その他の楽器隊偶人、馬彫刻、威儀偶人については、各々生前の位、所司に準じ、木製、陶製で七寸の高さを超えてはならず、また過度な装飾を加えてはいけない。)」とある。⁹⁷⁾ 執役人は名の通り労役の責任者であり、「不過一尺」の高さは、他の「不得過七寸」より、身長を三割高くすることで、身分的な違いを表している。前漢時代初期の湖南省長沙市馬王堆1号墓出土の、木製、彩絵の「冠人」俑は最も代表的な実例である(1972年、湖南省博物館蔵)。まず多くの立っている俑に対し、冠人俑は座っている。また侍女俑、奴婢俑より、座っても四割ほど高い。この冠人俑は、性質上『五代会要』の執役人に当たる。⁹⁸⁾



〔宋〕江蘇省鎮江市・呉郡包成組等落款の泥人

「人」字を含む俑の別称は、象人、庸人、誕人、泥人などがあり、文献にしばしば登場している。以上は、俑に代わる名称と推察されるが、観賞用の人体彫刻品の可能性もある。例えば、よく知られている江南地域の江蘇省蘇州、鎮江、無錫の泥人は宋代から現代に至るまで作られている。⁹⁹⁾ 北方の代表例とし

ては泥塑名人による天津「泥人張」が挙げられる。このように、泥人と言っても、一概に墓用の人像と全く無関係のものも多く含まれる。

(四)「偶」、「人」以外の名称

「偶」、「人」類の組み合わせは、俑に代わる名称の主流であるが、それ以外にも俑の別称が散在しており、主に四グループに分けられる。

【明童、盲僮】

前漢の湖南省長沙市馬王堆3号墓出土の遣策には、「男子明童凡六百七十六人、女子明童凡百八十人」と記されている。¹⁰⁰⁾ この「明」には明器の意味が含まれる。明童の「童(僮)」は、単に年齢的に少年、少女を指す一方、侍従、侍女の職務を意味する可能性がより大きい。童は、後漢・許慎著『説文解字』に「未冠也(成人でない)」と解釈されている。¹⁰¹⁾ 冠礼の年齢は定められておらず、概ね16～17才とのことから、童は16～17才未満の青少年となる。後漢・班固著『漢書』には、「家僮数十人、之魯朱家所買之。(家僮数十人が之魯朱家に買われた。)」という記述がある。¹⁰²⁾ また、同書では「高祖既定天下、過沛、与故人父老相楽、醉酒歓哀、作『風起』之詩、令沛中僮凡百二十人習而歌之。(高祖が天下統一に果たし、故郷の沛を通りかかると、故人父老が集まって酒に酔い歓哀し、『風起』という詩を作って僮児の百二十人に習い歌うことを命じていた。)」とも書かれている。¹⁰³⁾ 前漢時代の益州の王褒という人物は、未亡人楊恵から家奴の便了という少年を買う際に『僮約』を結んだ。僮に「家」を加えれば、「家僮」となり青少年家内奴婢の総称という解釈ができよう。¹⁰⁴⁾

後漢・趙曄著『呉越春秋』には、「梧桐心空、不為用器、但為盲僮、與死人俱葬也。(梧桐は中が空洞であるため、器具として使うのは無理だが、盲僮として、死者と共に埋葬される。)」と述べられている。¹⁰⁵⁾ 桐の一種である梧桐から作る盲僮を、「與死人俱葬」することに大いに注目したい。盲僮は年少の侍男、侍女を模した副葬する人体彫刻品で、俑を指すことは明白である。「盲」という言葉は、漢代では失明者の意味

もあった。また『説文解字』には「瞳のない目」という記述もある。これは「眼球が無い」もしくは「瞳だけ無い」という解釈で、前者はおそらく眼球の障害を表し、後者は瞳を表象しないという理解になるのではないだろうか。

『呉越春秋』、『説文解字』とも成書の時期は後漢である。初期の人像や俑の実物を見れば、殷代の四川省広漢市三星堆の人頭像、また秦代の陝西省臨潼県の兵馬俑、前漢時代の陝西省咸陽市の陽陵俑のような大軍団であれ、各地の個別題材の小型俑であれ、目の最も重要な構成要素である瞳の表象がなされていない。瞳の凹凸彫刻法を開発したのは欧州、中央アジアである。同時期の中国前漢の彫像では、瞳の表現がされていなかった。



〔殷〕四川省広漢市三星堆・人頭像



〔秦〕陝西省臨潼県・軍吏俑

また、初期の俑、特に後漢時代の四川地域では、しばしば非写実手法が採用されており、とりわけ顔面の作りは五官がおおまかに彫られ、瞳も当然無く、目の輪郭線さえもはっきりとしない例が多数見られる。おそらく、まだどのように目を表現したら良いかという工芸技法が確立していなかったものと思われる。死者と共に埋葬することから、盲僮は紛れもなく死後の世界のために供える物で、俑以外には考えられない。盲僮が俑の専門用語かどうかさらに検証する必要があるが、少なくとも今の段階では、俑に関する記載に限られている。¹⁰⁶⁾ また盲僮の別称として「亡童」が湖北省江陵県望山2号楚墓の竹簡遣策に記載されている。



〔漢〕四川省成都市・説唱俑

¹⁰⁷⁾

【ぎょうかん ふくちよう仰観、伏聴】

金、元時代と考えられる張景文著『大漢原陵秘葬經』の「盟器神煞篇」では、「仰観、伏聴、長四尺三寸、安埏道中。(仰観、伏聴は、長さが四尺三寸で、埏道に安置する。)」と記されている。¹⁰⁸⁾ また、清・徐松編『宋会要輯稿』では、北宋時代の河南省鞏県蔡家庄真宗永定陵に仰観、伏聴があると記されている。¹⁰⁹⁾

その他の例として、

後漢晩期、浙江省海寧県画像石墓の跪拝俑、¹¹⁰⁾

北齊武平四(573)年、山東省淄博市臨淄区崔博墓の跪拝俑(1973年)、¹¹¹⁾

唐代、河北省文安県麻各莊墓の伏卧俑などが、仰観、伏聴類俑に当たると考えられる。¹¹²⁾

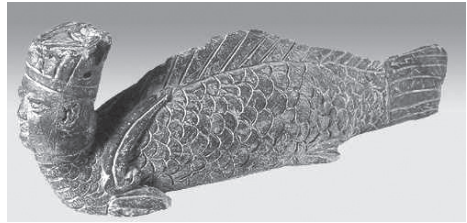
以上の発掘報告書には、動作から命名した跪拝俑、跪俑、伏地俑や、頭が人で体が動物という構成の人首魚身俑、人首龍身俑の記載がある。これは一種の便宜的な記述法であるが、古文獻に基づくと仰向く姿から仰観類と呼ばれ、胴体を横たえ、頭部が地面に付いている動作のものを伏聴類としている。また下記の「祖明、地軸」類との接点もある。¹¹³⁾

【そめい ちじく祖明、地軸】

唐代の河北省文安県麻各莊墓から「墓龍」と言われるものが発見され、その形状から「地軸」の類であろうと思われる。¹¹⁴⁾ また四川省成都市跳澄河宋代墓からも似たようなものが出土している。¹¹⁵⁾ 地軸の別名と思われる「強梁」、「窮奇」という名称が『後漢書』、『隋書』に記載されており、「祖明」と共に鬼を喰う神獣とされている。¹¹⁶⁾ 王去非氏は「祖明、地軸は鎮墓獸である」としており、定義、外形の検証を経て、一致する内容が多くあるという見解を示している。¹¹⁷⁾ 鎮墓獸は体の一部が人間の身体で表され、そこに翼や動物の足が加えられた姿をしている。春秋・戦国時代の楚地をはじめとして鎮墓獸が使用され、宋代以後、減少する傾向となった。鎮墓獸の別称として「魑頭」もよく使われていた。中世の例としては唐代龍朔三(663)年没の陝西省礼泉県鄭仁泰墓から出土しているものがある(1971年、国家博物館、陝西省博物館蔵)。

唐・蕭嵩主編『大唐開元礼』では、「凡明器、三品以上不得過九十事、五品以上六十事、九品以上四十事。当壙、当野、祖明、地軸、誕馬、偶人、其高各一尺。(明器の使用は、三品官以上が

九十品、五品官以上が六十品、九品官以上が四十品を超えてはならない。当壙、当野、祖明、地軸、誕馬、偶人、その高さは各一尺とする。』と記載されている。¹¹⁸⁾ 元・托克托、脱脱主編『宋史』には、「十二神、当壙、当野、祖明、祖思、地軸及留陵刻漏等、並制如儀。(十二神、当壙、当野、祖明、祖思、地軸及び留陵刻漏などの使用は、制度に従う。)」と述べられている。¹¹⁹⁾ 「十二神」は干支関係の動物で表現されている。南北朝時代に「干支俑」群が現れ、唐代にピークを迎えた。当壙、当野類、そして祖明、祖思、地軸類は鎮墓獸と同じく守衛、祈願の意味も持ち、完全に人の姿の物もあれば、人体要素が採用され、半人半獣の姿の物もあり、俑の一種である。地軸という名称は墓の「地面」に付くということと、細長いものを指す「軸」の意味が含まれている。俑と同様に人体あるいは変形した人体彫刻品で、横たわった姿勢であると推測できる。現代考古学名称の人首蛇身俑、人首魚身俑は、蛇身、魚身などの形状が細長いものである。¹²⁰⁾



〔南唐〕江蘇省江寧県・人首魚身俑

人首蛇身俑に関連のある例は春秋早期の河南省光山県宝相寺上官崗黄君孟夫婦墓の玉彫二点(1983年、河南省信陽地区文物管理委员会蔵)¹²¹⁾、また、北齊時代の山西省太原市南郊王郭村婁叡墓の鎮墓獸俑である。¹²²⁾ 江蘇省江寧県祖堂山南唐二陵から発見された人首魚身俑は冠状帽を被っている(1950年、南京博物院蔵)。¹²³⁾ 両者ともその地軸類に属すると思われる。

さらに隋代、大業元(605)年、北京市宣武区白紙坊墓、「人首四足魚身俑」(1976年)、¹²⁴⁾

唐代垂拱年間(685-688)、河北省南和県東賈郭村墓、「儀魚」とも言われる「人首魚身俑」(1990年)、¹²⁵⁾

唐代垂拱四(688)年、河北省南和県郭祥墓、「人首魚身俑」(1986年)、¹²⁶⁾

唐代永昌元(689)年、山西省長治北郊唐崔峒墓、「人首魚身俑」(1984年)、¹²⁷⁾

唐代天授二(691)年、山西省長治唐馮廓墓、「人首魚身俑」(1986年)。¹²⁸⁾

五代、江蘇省邗江県蔡莊墓(1975年)、¹²⁹⁾

五代、福建省永春県墓(1979年)、¹³⁰⁾

五代、福建省福州市劉華墓(1965年)、¹³¹⁾

十国時代、江蘇省南京市南郊祖堂山李昇墓(1950年)、¹³²⁾

宋代、四川省洪雅県墓(1973年)、¹³³⁾

宋代、江西省進賢県池溪郷焦家村墓(1972年)¹³⁴⁾などの墓から出土した地軸類俑の例として挙げられる。

【当壙、当野】

張景文著『大漢原陵秘葬経』には当壙、当野に関して「埳道口安当壙、当野二人、長三尺五寸。(埳道に安置する当壙、当野は、長さが三尺五寸である。)」という記録がある。¹³⁵⁾ 王去非氏は『大唐六典』巻二〇五「甄官令条」などの文献を検証し、出土物を参照して、「当壙、当野は天王俑または武士俑である」と指摘している。¹³⁶⁾

当壙、当野の置かれた位置は、墓室の入り口から近く、守衛の役割を持つ天王俑、武士俑に該当すると思われる。その例として『宋史』には「入墳有当壙、当野、祖思、祖明、地軸、十二時神、

志石、券石、鉄券各一。(墳墓の入口に当壙、当野、祖思、祖明、地軸、十二時神、志石、券石、鉄券の各一つが置かれている。)¹³⁷⁾ とある「埤道口」は入口であり、そこから順に器物の名前が挙げられている。入口から最も近いのが当壙、当野で、墓道口に置かれる天王俑、武士俑であろう。

【神殺（神煞）】

金、元時代に「神殺」という名称の俑類は、「神煞」^{しんさつ}とも称された。¹³⁸⁾

以上のように概算でも「俑」の別名は30個を超えている。下記の一覧表に示す通りである。「悪車」「涂車」のような器物関係を除き、また「象生」には俑の意味もあるが動物をモデルとしているものも多く含むため、対象外とする。

俑を含む葬具総称						
明器	盟器	冥器	法物	貌器	蔵器	凶器
臓器	秘器	鬼器				
「偶」字関連名称						
土偶人	土偶	土偶人	木偶	木偶人		
「人」字関連名称						
人	象人	人形	嵩里老人	桐人	鉛人	執役人
その他の名称						
盲僮	仰觀	伏聽	当壙	当野	祖明	地軸
象生	神殺（神煞）					

三. 「俑」別称続出の起因

（一）多難の「俑」字、その中断と復活

「俑」字の別称の多さは、俑の名称自体の多難かつ不運の歩みの写しでもある。長きにわたって俑そのものが使われていたにもかかわらず、その呼称の使用が極力妨げられた原因はどこにあったのだろうか。その理由を語る前に、まず「景泰藍」^{けいたいらん}、「唐三彩」の名称について触れることとしたい。景泰藍の製造方法は元々中東地域から伝わったとされており、イスラム帝国にある「大食窯」と関わりがある。¹³⁹⁾ 主に明景泰年間（1450～1456年）に盛んに生産され、傑作が続々と現れた。「藍」はメインとなる青色を指し、「景泰藍」と呼ばれるようになった。¹⁴⁰⁾ これら銅製の中国式七宝焼は、朝廷の管理のもと詳細な記録が残されている。明代の景泰年間以後には既に名称が定着し、ほぼ中断されることなく今日まで生産されてきた。そのため、製品になった時期に名付けられたと思われる。

また、「唐三彩」は唐時代における考古学、美術史、工芸史において、極めて重要な研究対象の一つであった。7世紀に誕生したものの、作り方が長きに渡り不明であって、再生できたのは20世紀に入ってからである。唐三彩と命名されたのは近代になってからであり、日本との関わりもあったとされている。¹⁴¹⁾ 唐三彩とは今の呼び方であって、物が生産された当時の名称は何だったのか、いまだに明確な結論が出ていない。唐代当時の文献では「偶人」と呼ばれる例もあった。¹⁴²⁾

このような名称に年号を含んだ「(明・景泰) 藍」であれ、近代に名付けられたと見られる「唐三彩」であれ、明確なイメージを持っていることから、別称の混在や勘違いがされることは無い。両者に比べ、俑の30以上も存在する別称群は、非常に複雑な構成となっている。また最も多く

使われた「偶人」の中には俑が含まれるものの、俑＝偶人とは言えず、別称群の使用にはより個別に各々検証する必要がある。

上記にまとめたように、俑は一専門用語でありながら、代替呼称が溢れている。これはどのような要因によるものであろうか。使用期間を考えてみると、景泰藍、唐三彩より俑は遙かに長かった。原始時代から、少なくとも 5、6000 年以上と考えると良いだろう。さらに、空間においても俑は漢代以後、全国範囲で生産、使用されていたのに対し、景泰藍の生産規模は俑と比べて極めて小さく、主に明、清時代の富裕層の多い都市などに限られていた。時間の長さや範囲の広さ、生産量の多さにより俑の呼称の連続性、安定性が維持できなくなり、遊離的性格が徐々に鮮明になっていったと考えられる。そのため、俑の複数の別称が登場しても、決して珍しいことではなかったと言えよう。しかし、これらが根本的要因であるかについてはまだ疑問が残る。

『論語』に現れた孔子の「俑論」から 2500 年が経ち、数百年に 1、2 回文人の断片的議論（本ページの名称と「俑実物」使用の時代推移表の「俑論」使用に示している）がなされたきりである。実際の埋葬記録関係類¹⁴³⁾の中では、前漢・毛亨の『毛詩』、南朝・謝靈運の『祭古冢文并序』以外、文献、墓誌銘、追悼文ではめったに見られない。2000 年以上の間、各時代の文人の間で散在的に行われた「俑解説」は、孔子「俑不仁論」の踏襲であり、実物の俑と「俑」名称の関連についてはほとんど文字化されることなく、異常ともいえる無縁状態が続いていた。

名と実が食い違って別々に存在する状況が一変したのは清代中期から晩期の間で、特に 20 世紀の初め頃であった。羅振玉氏が著書により再び「俑」字を登場させ、今日に至るまで漢字文化圏で副葬品の中の人体類を表す用語の中で最も頻繁に使用される名称となった。それと同時に、今まで代用された名称は次第に淘汰され、結果として代用呼称のほとんどが消滅していった。日本では性質上、俑と同種類のものを「埴輪」と呼び、中国俑は「土偶」と呼んでいたが、秦の始皇帝兵馬俑が発見されてからは、中国の副葬品の人像を指す用語として俑こそ最も相応しい名称と認められ次第に定着した。俑の名称誕生から混迷、忘却、停滞、回避した状況がようやく終わった。

以下のようにまとめることができる。

名称と「俑実物」使用の時代推移

時代	名称使用	実物使用	「俑論」使用
原始時代～殷・周時代	×	○	×
春秋・戦国時代	×	○	○名前出現
秦代～明代	×	○	○
清代中期～晩期	○名前復活	×	○
近代・現代	○	×	○

「俑」は、英文表示では「Terra-Cotta」、「Tomb figure」、または「Figurine」となり、1987 年ユネスコ世界遺産に登録された「秦の始皇帝の兵馬俑」は「Mausoleum of the First Qin Emperor」と訳されている。ここで、陶製俑と陶製馬の性質の違いが反映されていないのは、意識のローマ字表記世界の限界であろう。「俑」という字が内包するものは「埋葬用の人体彫刻品」であり、「Tomb figure」という表記は十分とは言えない。「俑」という名称の分析や解説作業は依然として、漢字文化圏の世界に留まっており、短い英語での表現によりその中身の全容を知るのは難しいようである。

(二) 無意識の不用

俑の歴史を振りかえてみると、明代中期に至るまで俑そのものの使用はほとんど中断せず継続していた。各時代の喪葬に関する文献、埋葬品のリストには、文字の痕跡がほとんど残されていなかった。墓に埋葬された人体彫刻と、孔子の語った俑は同一物であるにもかかわらず、なぜ長い間「俑」字が使用されていなかったのだろうか。おそらく無意識に使用しなかった場合と意識的に避けた場合の両方が存在していたと考えられる。この俑への疎遠感がある一方、慣れない言葉の不案内という背景もあった。

どの時代でも率先して俑を使用したのは、皇族、高官、貴族らの階層であった。これに続いて支配権や経済力を有していない下層民にも及んでいった。文字が読めない庶民は勿論、副葬品の一種類に過ぎない俑への追求に無関心であった位の高い階層の人は、文人のような学問的俑解釈に関わろうとしなかった。彼らにとっては使用する副葬人像彫刻を、安易に偶人と呼ぶ以外に何と呼んだら良いかは問題視されず、最も関心を示したのは何を表現するかという課題であった。その文字の由来が「偶人」であれ「俑」であれ、また「俑不仁論」などの議論であれ眼中になかった。これらは「無意識の不用」の人々である。各時代において最も通じやすい言葉が選ばれたのは、利用者にとっての利便性があったためと考えられる。各時代の民衆において、俑の実物と名称とが遊離した状況は、人為的な誘導ではなく自然の成り行きで、いわば無意識である。

(三) 「俑」字の回避

孔子「俑発言」を知っていた文人らは「俑」字についてどのように対処したのか。2000年の間、俑という文字の登場した経緯を検証すると、ほぼ例外なく孔子俑論に関する場合であった。文人らの行った解釈の内、孔子「俑論」に対する啓発的解説はごくわずかで、ほとんどが孔子の俑発言の上辺を踏襲したり拡張しようとしたものである。これらの解説者に含まれる文人らは、文字学者のほか、思想学者と時論学者であった。彼らの著作は学問の域に留まり、これを通じて文字の読めない人間の多い社会に発信した効果は乏しく、より多くの場合は無反応であった。

それらの文人たちが、実際に使用されていた陶製などの埋葬用偶人に対して「俑」と結びつかなかったのは何故なのか。文章としては残っていても、全く連想されなかったわけではないだろう。春秋・戦国時代以後、時を経て、俑は副葬品に欠かせないという社会的風潮になったが、特に孔子、孟子の議論のように問題視せず、俑の不名誉という感覚は希薄化していたと考えられる。孔、孟が論じたところの俑が、それぞれの時代で墓に埋葬された人形に関連性があるとしても、「去古已遠（過ぎ去りし日の出来事）」として追究する必要は無いと考えられた。これらの希薄化や忘却という現象は、不自然ではないと言えよう。

しかし、多くの実物の俑が使われる状況の中で、「今、なぜ俑という文字を実用していないのか」と指摘する者が誰一人いなかったのだろうか。喪葬文化において副葬偶人が孔子の言う俑に相当すると皆が連想も意識もしなかったということはあると得ない。より大きな可能性として同一物という認識を持っていたとしても、俑という文字に対する意識上の遊離、回避の傾向が長く続いたと考えられる。彼らは俑字に関して、孔子の時代と今の時代との接点がどこにあるかは探求せず、孔子の俑発言に関して、どのように説明すれば良いのかにのみに関心を抱き、現実問題がぼかされて

いた。元・陳皓著『集説』には、「中古為木偶人、謂之俑。(中古の時代に、木で作った偶人が使用され、これを俑と呼んだ。)」とあり、元代の人々は孔子以前を「遠古」、孔子生存の春秋・戦国時代を「中古」と呼び、淡々とした口調の軽さが感じられる。また、中古と著者の生きる元代を比較するのは、自らの研究の領域に属するものではなく、関わる必要すらないという認識であったのかもしれない。言い換えれば、論説者たちの範疇においては、この古字の解釈が、春秋・戦国時代に限定されていたのである。彼らの営む社会生活とは、何ら関わりのない「古物」に過ぎないとの思考を示唆している。

時には無意識的に、時には意識的に各時代に使用されていた「偶人」は、孔子時代の俑と同一物と思っても遠ざけ、言わば曖昧な処理がなされていた。また、埋葬目録の遺策、官府や役所の喪葬関連文書などにも俑の記述が見当たらない。慣習的に偶人などの言葉を使っていた状況からすると、俑字が既に半死文字または死文字となっていたと考えられる。「俑」字の実用上の表示機能が消失していたということである。

喪葬関連の典章、制度に関わる記載には、人体工芸品に対し多くの呼称が使用されていた。例えば、明時代の権威ある百科辞典『永樂大典』に収録された『大漢原陵秘葬經』では、希有な「神殺（きつ）」類までの俑関連名称が詳細に並べられているが、俑字だけはどこにも見当たらない。¹⁴⁴⁾ 公文書には無くても、民間における使用例は全く無い訳ではなく、断片的に表れた大変珍しい貴重な記録がある。前漢・毛亨著『毛詩』には、「黃腸既毀、便房已頽。…撫俑増哀。(黄腸が既に壊れ、便房も倒れ、…俑を撫で一層哀れになる。)」とあり、実際に俑という物を撫でていたことが示されている。¹⁴⁵⁾ 棺の外側の壁である「黄腸」と後室外の回廊である「便房」は共に墓葬関係の用語であり、「既毀」、「已頽」は崩れた墓室状態を表す。¹⁴⁶⁾ 「撫俑」という表現に示される通り、実物を「見て、触った」ということも重要であるが、「撫俑」という動作や「増哀」の感情表現に関しさらに検討したい。言うまでも無く最も意義があると思われるのは、俑という文字が使用されたことである。その後、南朝の宋国の謝靈運は『祭古冢文并序』で『毛詩』を引用している。しかし「撫俑増哀」の中の「俑」についての議論は展開されていない。¹⁴⁷⁾

また、北宋・歐陽修著『新唐書』に「比群臣務厚葬、以俑人象驂、眩耀相矜、下逮衆庶、流宕成俗。(群臣が争って厚葬を求め、俑、さんぽ驂馬を以て、互いに誇示することは、庶民たちまで及び、広い地域の慣習となる。)」と記されている。¹⁴⁸⁾ 今の段階ではこれが、正史書類に「俑」字が使われたごくわずかな例である。

(四)「俑」字の復活

明代中期から俑字への解釈が次第に少なくなり、俑使用も低調期を迎え、清代以後はほぼ完全に歴史舞台から立ち去っていった。しかし、近代に入り「俑」字の関連記載が突然に現れた。それは、漢代毛亨や南朝謝靈運の「撫俑増哀」のような文学的描写ではなく、俑の実物についての学者と店員との実際の会話の記録である。それは北京の骨董市場の琉璃廠での出来事であった。羅氏の著書『古明器圖録』の序文で、次のように述べられている。「光緒丁未(1907年)冬、私が首都北京で初めて古俑を収集したのは、琉璃廠の商店であった。店員の話によれば、その俑は中州(河南省)の古墳から出土し、かなり年代の古いものだという。盗掘者は、これらの骨董を売り捌くため、墓から数々の珍宝を奪ったが、俑は度外視されていた。店では珍宝を買い上げた際、

故意に持ち込まれたわけではない俑を目にしても、それを換金できるとは認識してはいなかった。私は、墳墓から出土した物の全てが考古学に役立つと彼らに告げ、さらに古代の俑の他、明器を全て収集したいと述べた。すると店員は、私にどのような文物を入手したいのかを一点一点挙げさせた。そして、私はたまたま店の机の上に置かれていた『唐会要』という書の概要を説明した。翌年の春、〔盗掘者によって〕多くの明器が〔北京・琉璃廠の商店へ〕持ち込まれた。それらは俑の他、伎楽師の彫像、農用地と家畜小屋の模型、車馬、井戸と竈、杵と臼、鶏や犬など家畜の明器など、あらゆる物が揃っていた。後に店からの知らせを受けた私は、大金を支払い〔明器を〕手に入れた。これこそ、古代明器登場の幕開けである。』¹⁴⁹⁾

皮肉ながら言わざるを得ないのは、俑字が再登場し慣用化された背景には、俑の価値が指摘されたことにより、中国最大の盗掘の「聖地」である河南省で闇商人の売買が活発化したことが一役買っている。時を隔てた1915年4月、羅振玉氏は日本滞在中、大村西崖氏の著書『支那美術史彫塑篇』の序文で再びこの事柄を取り上げ、「俑の発現は、東は扶桑から、西は弱水にまで及ぶ。」としている。¹⁵⁰⁾ 扶桑から弱水までは唐・杜甫の『白帝城最高樓』には、抽象的に広範囲を指すとされている。¹⁵¹⁾ その後、俑字の普及はすぐになされた訳ではなく、清の末期から中華民国期にかけて依然として土偶、泥人、明器などの名称が併用されていた。魯迅は日記の中で、北京松雲閣で購入した俑を「土偶」、あるいは「偶人」と称している(1923年、1924年)。¹⁵²⁾ 20世紀から今なお「土偶」、「泥偶」の名称が「俑」字と共に見られるが、埋葬用、工芸品が分りにくい人形、土偶、泥人、偶人のような用語が次第に弱体化し、「俑」字自体の持つ簡素な一文字という利便性、明確性のある語彙が歓迎され、俑字の独り勝ち情勢が鮮明となっていった。

また中国では、アヘン戦争以後、西洋文化の中国進出によって、より科学的な命名が活発化した。非古派、疑古派の躍進は清朝末期、民国初期の時代的風潮とされ、名称を含む歴史文化を見直す動きが加速した。この時期に現れた羅振玉氏の議論も時代の流れを反映しており、乱立した俑の別称を一掃するでもなく、俑の名称を復活させ、統一への決定的第一歩となった。

俑字が再び使われるようになり、墓出の人体彫刻類における絶対的な地位にまで登りつめたのは誠に奇跡的である。この呼称が蘇り、復活を果たしたもう一つの要因は無視できない。それは儒家の絶対的権威が揺るぎ、孔子の言ったことは遵守すべきであるという社会制約力がかなり弱くなったことである。かつての俑使用に対する名誉、不名誉ということが問題視された時代から、孔子には反対された名称であっても、使っても良いとされる時代になった訳である。こうして、学者の論著や発掘報告書への度重なる掲載によって、「俑」は副葬品の中の人体類を表す用語の中で現在最も使用頻度の高い用語となり、その上、考古学の専門領域を越えて全社会においてよく知られる言葉となった。

しかし、まだいくつかの難問が残っている。欧米、日本では各時代の俑の表示は、単に「時代名+俑」で、「殷俑」、「漢俑」などの名称が付けられている。中国では「漢俑」という呼び方は使われているが、殷墟で発見された埋葬用の人体彫刻品は「殷俑」とは呼ばれていない。春秋時代以前は俑が無く、春秋時代以後ようやく現れたという認識が支配的であり、この背景から「殷俑」という呼称が認められず、その考えは現在でも根本的に変わっていない。名称機能が復活しても、使用時期がまだ春秋時代以後に限定されているようである。完全に再生できない原因はどこにあるのだろうか、別論で触れることとする。

四. 明器と俑

(一)「明器」とは

「明器」という言葉がいつから使われるようになったかはいまだ不明であるが、初期の文字記録として表れたのは、前漢・戴徳、戴聖編の経書『礼記』である。「之死而致死之、不仁而不可為也。之死而致生之、不知而不可為。是故竹不成用、瓦不成味、木不成斲、琴瑟張而不平、竽笙備而不和、有鐘磬而無簋廬。其曰明器、神明之也。(死者を弔いもしくは葬式に行き、全く死んだ者〔何の知覚もないもの〕としてみるの、不仁であって、そうした扱い方は良くない。だから死者に対しては、死と生との中間にある者として扱うのが良い。従って死者に用いる竹器は実用的ではなく、瓦器は焼きが充分でなく、木器は磨きが足らず、琴瑟は絃を張っても弾奏に適さず、竽笙は並べてあるだけで音は合わず、鐘磬は鳴る簋廬しかけを欠いている。死者を神明の者とするから、供える品を明器と呼ぶ。)」とある。¹⁵³⁾『礼記』において「夏后氏用明器、示民無知也。(夏后氏は明器を供えることで、民に、死者は知覚がないことを示した。)」との記述もあり漢代以前には、既に、明器の使用に宗教的意味合いが含まれていたと考えられる。

喪葬文化を語る上で副葬品の代名詞として最も頻繁に使われる用語は、この明器であろう。墓の中に納められた全ての品を明器と称し、死後の世界の供え物である俑も、明器群の構成員である。明器の概念や名称に由来する「神明」という言葉に注目したい。¹⁵⁴⁾「神明之器」は実に曖昧で抽象的な一面があり、その真の意味は汲み取りかねる。¹⁵⁵⁾神明は、名詞の「神」と形容詞の「明」から成る。この言葉は漢代に至っても、依然としてかなり難解な言葉であったようだ。前漢・桓寛著『塩鉄論』における、「古者、明器有形無実、示民不可用也。(古代、明器とは有形無実で、民は使用してはいけないことを示す。)」のような実用に堪えないとの解説は、まさに前漢時代にまで及ぶ儒学者の不明瞭な議論の継続である。「有形無実」であると「示民不可用」となるのか、漢代の埋葬に多く使用された明器とは乖離した解析だと思われる。孔子の副葬品の認識論によれば、古くから有る副葬品の涂車、芻霊の使用は明器の道であるとし、使用を認めている。しかし、何故「民」つまり庶民だけが使用できないのか。祭祀において庶民は差別されるという孔子ら儒学者の見解なのか。¹⁵⁶⁾

『礼記』には「夫明器、鬼器也。(明器とは、鬼器である。)」とあり、後漢・許慎著『説文解字』には「人所帰為鬼(人が帰途に辿り着いたら鬼になる)」とある。甲骨文の「埋」や「鬼」という文字の形状は、「土」字や、「田」の下に「人」を配置するという埋葬と関係のある構造になっており、殷墟などで発見された屈肢式埋葬法との関連性が高い。「鬼器」は死後に使用する器を指し、副葬品の類であると考えられる。¹⁵⁷⁾ おそらく殷代以前から「死者＝鬼＝帰」の連鎖的思考が継承され、その考えに基づき、明器は「鬼(死者)用の器である」ということが殷・周時代から定着していったのであろう。孔子は「夏后氏用明器、示民無知也。殷人用祭器、示民有知也。周人兼用之、示民疑也。(夏后氏は死者に明器を供えることで、民に、死者は知覚がないことを示した。殷朝では祭器を供え、死者にも知覚のあることを示した。そして、周の人は二者を兼用し、民は〔死者に知覚があるかどうか〕を疑った。)」としている。¹⁵⁸⁾ 明器であれ祭器であれ共に喪葬文化に関する実用物であり「兼用之」できることから、性質的に同一視されていたようである。そもそも儒学者は明器を「神明之器也」と言っているが、具体的に解説していないため、明器の性質が特定

されず、ぼやけた「明器論」となっている。文献に残された「明器」の語意の範囲が広く、単なる葬器ではなく祭器など他の器物の名称としても使われていた。埋葬用以外の器物を表す明器も検証の対象にすべきである。

自然や神霊、祖先神を祭り、特定の記念式典に用いる祭器は、上記の文献を含め多くの記載で、はっきりとした明器との区別が見られない。祭器が主に地上で使われるのに対し、明器も地上で使用する例があり、祭器は儀式、礼拝での使用後、地下に埋葬される記録もしばしば見られる(唐代の『博異志』、また元代の『曲江池』を参照)。前漢・劉向著『戦国策』には「願請先王之祭器、立宗廟於薛。(先王の祭器を使い、薛国に宗廟を建てることを願う。)」とある¹⁵⁹⁾ これらの祭器は本来なら埋葬とは関連性が無いが、出土品には明らかに祭器として作られたものもある。死者へ奉仕する道具として用意されたものでもなく、埋葬に転用されたと考えれば、明器のグループに包含できる。漢代までの発掘物に示された「明器」には、純粋な副葬品の明器もあれば、また兼用的な祭器及び以下に明德之分器の意味もあった。

副葬品でもなく祭器でもない明器として、恩賜の証である「明德之分器」と言われる器物が存在していた。左丘明著『左伝』には、「王曰、『伯氏、諸侯皆有以鎮撫王室、晋獨無有、何也。』文伯揖籍談対曰、『諸侯之封也、皆受明器於王室、以鎮撫其社稷、故能薦彝器於王、晋居深山、戎狄之與鄰、而遠於王室、王靈不及、拜(拝)戎不暇、其何以献器。』(周景)王が『伯氏よ、諸侯らは皆、貢品を我が王室に納めているが、晋国だけが納めないのはなぜか。』と聞かれると文伯は籍談へ一例をして、『諸侯が分封された際、各国が王室にて恩賜の明器を受け取り、それぞれの国の社稷を示し、彝器を王室に貢献する。晋国は偏僻の山奥にあり、また戎狄と鄰居し、王室から遠く、王の神霊が届かず、戎狄からも絶えまなく侵犯されており、どうして貢げるでしょうか。』』という記載がある。¹⁶⁰⁾ この種の明器は、中央から権力を与えられた地方長官の信頼の証しのようなもので、諸侯の正統性を示し、地方政権にとって象徴的なシンボルであった。

南宋・王厚之著『鐘鼎款識』の「秦鐘銘」の銘文には「秉明德(明德を持つ)」と記されている。¹⁶¹⁾ また、春秋時代の河南省上蔡県郭庄王金鼎1号楚墓から出土した青銅器にも同じ意味合いの「持明德(明德を持つ)」という文字が刻まれている(2005年)。¹⁶²⁾ 明德は、左丘明「皆受明器於王室」という明器の性質を持つと考えられる。孔子の弟子曾参(前505年～前434年)の著作とされている『大学』では「大学之道、在明明德、在親民、在止於至善。(大学の道は、明德を明らかにし、民に親しみ、至善に留まることである。)」とされている。知徳を兼ね備えて世に良い影響を及ぼす立派な人物、即ち大人とは、先ず生まれながらに与えられている明德を明らかにすることで、誰とでも親しむことができる。さらに判断が正しくなり、常に道理に叶った行動が出来るように人間であるとしている。「古之欲明明徳於天下者、先治其国。(古の明德を天下に明らかにせんと欲する者は、まずその国を治める。)」とあり、「康誥曰、克明德(康誥曰く、よく徳を明らかにする。)」ともある。¹⁶³⁾

そもそも「明德」を解釈する『大学』は、北宋時代の思想家程顥、程頤が「初学入徳の門」と位置づけている。孔子の意を汲む修養中心の内容であり、徳に徹することで春秋・戦国時代の変動期に臨む学問集団へ、「礼崩楽壊」局面への抵抗、明德理念を再確認させようと考えたのであろう。「明德之器」の素材としては、良金とされる青銅器が好んで選ばれた。殷代から西周時代の明德の青銅器に刻まれる銘文は、王様からの恩賜に対する政治的意味を強く含む賛美詩のような内容

が多い。

上記にまとめたように、実際に明器は少なくとも副葬品、祭器と明德之器の三種類であるが、学术界において明器と言えば、喪葬器具を指し、その言葉の範疇は偏執的である。本来なら含まれてもよい祭器と明德之器が除外されており、いまだに偏った状況が続いている。唐・李林甫、張説、張九齡ら撰『唐六典』の「甄官令」項目の「甄官署掌供琢石、陶、土之事、…凡喪葬、則供其明器之属。(甄官署は石、陶、土への提供を掌握し、…すべての喪葬用品は、明器類に属する。)」という記載から、「明器」は喪葬品の代表として使用された言葉である。¹⁶⁴⁾ この『唐六典』は玄宗時代の中央政府の公文書であり、中国の最も古い行政法典でもある。言葉の選定に定評があり、「凡喪葬」におけるあらゆる道具は明器であるとしている。また甄官令が明器提供全てを統轄するとしている。唐・谷神子著の志怪小説『博異志』には「自是不疑郁悒無已、豈有与明器同居、而不知之省、殆非永年。(張不疑がどっぷりと鬱にひたった、何故明器と同居しているのか、しかも何も気にしない。このまま死んでいってしまうのではないか。)」と書かれている。明器が葬儀用や埋葬用だけに使用されていたため、「与明器同居」は異常で不吉な状況を示している。「なぜ生きている人間が、明器と同一空間に暮らすのか」という張不疑の不可解な行動に疑問を呈することで、明器の副葬品としての性格を強調している。¹⁶⁵⁾ 五代・劉昫著『旧唐書』に「送葬明器、皆依令式、並沈於墓所、不得衢路昇行(副葬用の明器は法律に従い、埋葬すべきで、それらを担いで街中を練り歩くなどしてはならない。)」とあるように、明器が送葬するためのものであると記載されている。¹⁶⁶⁾

さらに元・石徳玉(石君寶)著『曲江池』第二折の台詞では、「〔ト兒玉云〕今日有個大人家出殯、擺設明器、好生齊整、我和你看一看波。(〔ト兒玉言う〕今日、金持ちの家では葬儀が行われる。明器は安置され、きちんと並べられており、君と共に見に行ってみよう。)」とある。¹⁶⁷⁾ この台詞に述べられているように明器は地上の葬儀に用いられないわけではない。使用後焼かれたか、あるいは墓に入れられるかであるが、いずれにしても儀式品、副葬品の死者埋葬に関連する品である。唐代以後の多くの文献には埋葬地で紙製の馬、屋敷、人形、貨幣、服などを燃やし、他界した親族を弔う儀式が執り行われると記載されている。『曲江池』の「擺設」や「齊整」という台詞を考えると、陶磁器類の明器というより紙類の明器の可能性が大きいと思われる。地下の安置物とは別に地上の喪葬儀式に紙類の明器が用いられる風俗は、数百年前の時代に定着し今日に至るまで継承されている。

(二)「明器」の別名など

「明器」の別称としてよく使われるのは「盟器」や「冥器」である。金、元時代の人物とされる張景文著『大漢原陵秘葬經』は喪葬専門書であり、各身分における俑使用の内容を含め、明器に関する制限、寸法、安置場所などが詳細に書かれている。¹⁶⁸⁾ この書物には他の関連書より明器の概念、範疇、外延が正確に把握されている。その後の明代官書の『永樂大典』卷八一九九、一九八、「陵」項目には『大漢原陵秘葬經』の全文が収録され、喪葬文化に関する重要な書籍となっている。

¹⁶⁹⁾ 本書の「盟器・神殺」篇では「盟器」はすなわち「明器」であるとしている。盟器の「盟」字は、長い間「明」と共通に使用されていた。現代中国や東南アジアで亡くなった人間を送る儀式は主に葬儀、旧暦の清明節、死者の命日などに行われ「冥器」という名称も使用されている。「冥」の

字は冥界で使用されるという性質がより明確である。

盟器、冥器それぞれの発音は明器に近く、それぞれの漢字の意味がある一方、言葉の転用という経緯もあったのだろう。互いに名称が取り替わり、また併用された時期もあった。明代『永楽大典』に収録されている宋代官修の『宋会要』に基づき、清代徐松が再び収録した『宋会要輯稿』には「少府監言、検会永熙陵法物。比永昌陵凶仗又増惡車、…、象生器物。(少府監が、永熙陵の法物を点検し永昌陵の凶仗〔明器〕より惡車、…、象生類の器物が多くなったと指摘した。)」とある。「法物」もまた「明器」の名称の代替えであり、「凶仗、惡車、象生器物」などはいずれも具体的な器物の名称である。凶仗、惡車などの不吉な名称は、唐代の葬儀屋である凶肆きょうしなどの名称と意味上の共通点があると思われる。¹⁷⁰⁾ 惡車はおそらく春秋・戦国時代に現れた塗車のような運搬具類の機械模型であり、象生器物の「象生」は生物体つまり人間や動物を喩えるもので、俑も含まれる。

「明器」の別称

盟器	冥器	法物
貌器	藏器	凶器
臙器	秘器	鬼器
神殺	神煞	

(三)「明器」の中の俑類

「明器之道」について孔子は塗車、芻靈を取り上げており、共に「明器」に属し「道」に沿う道具であり、両者は「自古有之(古くからある)」と解説している。俑も明器の性質を具えているのに、孔子の言う明器之道から除外され、明器グループの一員でなかった理由は、氏の俑不仁論から推察できる。¹⁷¹⁾ 仁義という視点から孔子にその使用の正当性が認められていなくても、俑そのものの喪葬関連との位置づけや副葬品という役割は変わらない。

戦国時代以後において、俑の使用量が多くなっても明器に属するかどうかについては、依然として不明確な状態が続いていた。1000年の歳月が経ち唐代に至ると、俑歴史の第二隆盛期を迎え、俑も明器の一種との認識が定着するようになった。『唐六典』の「凡喪葬、則供其明器之属。(すべての喪葬用品は明器類に属する。)」は最も簡潔なまとめであり、また『旧唐書』の記載の一篇にも「王公百官競為厚葬、偶人象馬、彫飾如生、徒以炫耀路人、…望王公以下、送葬明器、皆依令式、並沈於墓所、不得衢路舁行。(王公貴族及び身分の高い役人は競って厚葬を行い、偶人や馬を作り、生きているかのように装飾してこれを見せびらかす…王公貴族へ、副葬用の明器は法律に従い、皆墓に埋葬すべきで、それらを担いで街中を練り歩くなどしてはならない。)」とある。俑類の「偶人」や動物類の「象馬」など喪葬品の全てが明器に属するとしている。¹⁷²⁾ 同様に金、元・張景文著『大漢原陵秘葬經』の喪葬専門書は、俑が明器に所属するという関係性を明確にしている。¹⁷³⁾

1916年、自らの所蔵品に基づき出版した羅振玉氏著『古明器図録』では、俑が明器の一種であるという考えが示されている。¹⁷⁴⁾ 1933年、鄭徳坤、沈維鈞両氏著『中国明器』も同じ主旨である。¹⁷⁵⁾ 今日では大多数の書物において、あらゆる墓の出土品を明器と称している。俑が明器に属するといった見方は、中世以後の正確な認識論の踏襲であると思われる。しかし学術界においては

俑を明器グループから除外して別々に議論し、明器と俑を並列させて対等に扱うという正常とは言えない状況も続いている。

ここまで明器と俑の関係について述べてきたが、先にも述べた様に俑の名称は長く表舞台に登場せず替わりとなる名称が使用された。主に漢・桓寛著『塩鉄論』の「桐馬偶人」、班固著『漢書』の「古人用以事神及送死皆木偶人、木偶馬。(古人が神への祭祀をし、死者を送る際に用いるのはすべて木製偶人、木製偶馬であった。))」、王符著『潜夫論』の「今京師貴戚、郡県豪家、生不極養、死乃崇葬、…多埋珍宝、偶人車馬。(今日都の王侯貴族や郡県の豪族たちは生前極めて栄華な生活を送り、死後も人目を引く葬儀を行なわぬ者はない。〔彼らの用いた品々は、〕いずれも金を施し、玉を鏤めたもの、…多くの珍宝や偶人及び車や馬の模型が埋葬される。大規模な墓の周囲には、松柏を植え、また草廬や祖廟を建造するなど僭越な埋葬が行なわれている。」などの記載の通りである。これらは以下のように表にまとめることができる。

明器の俑類				
名 称	人 字	芻 字	偶 字	泥 字
	偶人	芻靈	偶人	泥象
	桐人		陶偶	泥像
	木偶人		土偶	
			木偶人	

明器の動物類			
桐馬	象馬	木偶馬	車馬

明器の器物類	
涂車	車馬

(四) 明器における俑の位置づけ

欧米では、「俑」の呼称としていまだに中国語の「yǒng」、日本語の「よう (yo)」の発音を採用せず意識している。明器と俑の主従関係を議論するには、主に漢字文化圏の日中学術界の実例を見ていくのが妥当と思われる。

濱田耕作氏著『支那古明器泥像図説(総論)』の中でタイトル、目次、内容では、「明器」、「泥像(俑)」を並列させて同一の役割を備えたものとして泥像(俑)は明器には含まれないとの見解が示されている。氏はその論著を十章に分けている。

- 一．支那古明器の出現
- 二．明器 泥像を作製するにあたっての動機
- 三．漢代の泥像
- 四．漢代の什器及びその他の明器
- 五．六朝の泥像
- 六．唐代泥像の発達
- 〔以後略〕

泥像(俑)と明器を並列させ、泥像(俑)が明器類に所属する関係とは見做していない(1926年)。¹⁷⁶⁾

21年後出版された小林太市郎氏著『漢唐古俗と明器 土偶』のタイトルにおいても「明器」、「土偶」は異なる種類として区分されている(1947年)。¹⁷⁷⁾ 両氏が明器、泥像(俑)、土偶(俑)をこうした配列にしたのは、副葬品でありながらも、それぞれを別々のものとして扱っていることによるものであろう。前者を器物、後者を人形と考えるという認識を示唆している。

徐吉軍氏ら著『中国喪葬礼俗』では、俑は明器に属していると述べる一方、明器の項目から俑が除外されている。例えば、第七章第一節では25頁に渡り明器制度に触れ、明器の早期の形態及び形成に関する変遷について論じているが、俑については一言も触れていない。また、同じ節の「明器挙要(三)、俑」の文頭の部分では、「俑は中国古代における副葬用の偶人であり、明器に属する」と記載されているなど、「明器」という言葉の使い方について一致しない論点が見られる(1991年)。¹⁷⁸⁾ この状況については今世紀に入っても根本的に改善されていない。胡国強氏ら著の出版物でも明器、俑両者を並列し、論述している。

故宮博物院蔵品大系(雕塑編1) 胡国強著『戦国至南北朝俑及明器模型』、

故宮博物院蔵品大系(彫塑編2) 田軍著『隋唐俑及明器模型』(上)、

故宮博物院蔵品大系(彫塑編3) 田軍著『隋唐俑及明器模型』(下)、

故宮博物院蔵品大系(雕塑編4) 王金利著『宋元明俑及明器模型』などがの俑と明器の並列的な論述である(2011年)。¹⁷⁹⁾

以上の例として挙げている濱田、小林、徐、胡氏らによる「明器、俑分離論」の発生は何故なのか。その基準が定められた背景として、明器が墓用の建築模型、生活用品(その一部は死者の生前の実用品だった)など器であるというイメージが非常に強いのではないだろうか。「器」という文字にこだわり、「俑」は人像であって、器ではないので明器とは区別すべきであるという見解に至ったと思われる。

唐代以後に確立した明器とは「埋葬品を網羅する」という定義があるにもかかわらず、「器物類埋葬品」と「人体彫刻類埋葬品」とに再分類することは不相応である。例えば、野菜には白菜があり、明器には俑があることと同じように、「俑は明器の一種である」という主従関係が明白であるのに、「出土品には、明器、俑がある」と記載すると、「八百屋で、野菜、白菜を売り出している」という不両立の表現になってしまう。このような記載は混乱を招き、適切な表現ではない。中国における「俑」字の復活は100年以上前の清朝末期であり、日本で中国俑(「泥像」、「土偶」)が注目され始めたのは明治時代以降である。両国とも俑、泥像、土偶など副葬品は明器に属するという認識がある一方、別々に独立させても構わないという異論の存在も清朝末期から今日に至るまで続いてきた。

五. 偶人とは

2000年以上の長期にわたり、「俑」の別称として「偶人」という用語が最も多く使われていた。後漢の鄭玄、趙岐の「俑、偶人也(俑は即ち偶人である)」は、単に「偶人」という分かりやすい言葉で俑を解釈したに過ぎない。「俑は偶人の一種である」という表現であれば正確である。俑を

偶人とし、同等とすることは間違いであり、俑ではない偶人も存在しているためである。

後漢・許慎著『説文解字』には、「偶、桐人也。従人禺声。(偶とは、桐製の人体彫刻品である。人偏で、禺と発音する。)」と書かれている。¹⁸⁰⁾ 南朝の宋・裴駰著『集解』には「禺、寄也。(禺とは、寄するという意味である。)」¹⁸¹⁾とあり、また唐・司馬貞著『索隱』には「禺、音偶。謂偶其形於木、禺馬亦然。(禺とは、偶で発音する。禺と言えば木に取り付けるもので、禺馬も同じである。)」と記されている。禺は木製馬車の模型とも関連性があるようだが、この「木に取り付けるもの」という表現と禺の関係性がについては今後検討していく必要がある。¹⁸²⁾『漢書』の「驪山之徒数十万人、黥布皆與其徒長豪桀交通、乃率其曹偶、亡之江中為群盜。(驪山の刑徒数十万人は、徒長豪桀の黥(英)布と親交がある。その奴らを率いて、江中へ逃亡し強盗になった。)」における、「偶」は「偶数」の意味を持つものではなく、複数や多数などを意味していたものである。¹⁸³⁾ 漢代成書と思われる『爾雅』には、「偶、合也(偶とは、合併である。)」と解説されており、今の「偶数」の定義との接点が少なからずある。¹⁸⁴⁾ 唐代の顔師古は「偶、並也、対也。(偶とは、並び、対になるという意味である。)」としており現代の1対、2対というような「偶数」の意味と一致している。¹⁸⁵⁾

(一) 寓話の中の「偶人」

前漢・劉向著『戦国策』における泥の人形と桃梗とのやりとりは、頻繁に研究者に引用され、戦国時代の彫刻芸術に関する課題が論じられている。これはその時代の審美感や素材の選択などの分野への啓発的議論とも言えるが、寓話の性質が色濃く反映されている。単なる民話の域に留まる可能性もあるが、早い段階で「偶人」という言葉が使われていることに意義がある。¹⁸⁶⁾

(二) 的となる「偶人」

最も古い偶人の記述と思われる前漢・司馬遷著『史記』によれば、「帝武乙無道、為偶人之天神、与之博、令人為行。天神不勝、乃僂辱之。為革囊盛血、仰而射之、命曰射天。(帝である武乙は無道の王であった。人形を作り、これを天神と呼び、そして賭事を行った。天神が勝たなければ、これを罵った。また革袋を作り、中に血液を入れ、高い場所に提げ、それを矢で射って、『天を射た』と称する)」とある。¹⁸⁷⁾ 天の神様を冒瀆した帝武乙が天罰を受けたとされているが、殷時代以後の政権で、殷王を貶める思惑から作られた可能性もある。天の神に扮する偶人を強調しており、「与之博」の遊戯をする人物は文面から見て、帝武乙本人かまたは側近であろうと推測される。春秋時代に至っても依然として同種の遊戯が行われていた。以下に例を示していく。「今宋王射天笞地、鑄諸侯之像、使侍屏候、展其管、彈其鼻。此天下無道不義。(今、宋王は天に矢を射て、地を鞭打ち、天下の諸侯たちの像を鑄造しては、それを厠に置き、両腕を引張っては像の鼻頭を弾き飛ばしている。これこそ、天下の無道、不義の王と言うべきである。)」射手は宋王で、その対象には各国の諸侯が当てられている。¹⁸⁸⁾ また「於是滅藤伐薛、取淮北之地。乃愈自信、欲霸之速成。故射天笞地、斬社稷而焚滅之。日、威服天下鬼神。(そこで〔宋王は〕、藤を滅ぼし、薛を伐ち、淮北の地を攻め取った。こうして、いよいよ自信をつけ、覇者となることを一刻も早く達成しようと、天を射、地を鞭打ち、〔国が奉祀してきた〕社稷の神体を切って焼き払い、『天下の鬼神を威服する』と言った。)」ともある。¹⁸⁹⁾ 宋王の射撃の対象は、時には木偶人、時には金属の「諸

侯之像」であった。木像は「射る」、金属像は「弾き飛ばす」方法がとられた。また、「秦欲攻安邑、恐齊救之、則以宋委於齊。曰、宋王無道、為木人以象寡人、射其面。(秦は〔魏の〕安邑を攻撃しようとするが、齊が〔安邑へ〕援兵を送るのを恐れているのを、宋の乱政を利用して、〔齊の〕注意を反らせようと〔齊王に〕こう述べた。宋王は無道である。木で私に似せた人形を作り、その顔に矢を射ている。))」¹⁹⁰⁾との記述もある。

『後漢書』にも同様に、「王莽素聞其(齊武王伯昇)名、大震懼、購伯昇邑五万戸、黄金十万斤、位上公。使長安中官署及天下郷亭、皆画伯昇像於塾、旦起射之。(王莽がもとより齊武王劉縯〔字伯昇〕の名を聞いており、大変恐れて震えており、劉縯の首を取るものは五万戸を封じ、黄金十万斤、上公の位にするとした。さらに長安の官署、郷亭に於いて劉縯の画像を書かせて、弓の的として起射させた。))」¹⁹¹⁾などの記載がある。また、司馬貞著『索隱』には「匈奴至、為偶人象鄧都、令騎馳射、莫能中。(匈奴軍が来て、鄧都に似せた人形を作り、騎者に命じて射させたが、遂に当たらなかった。))」とある。鄧都は漢代雁門関太守であり、匈奴に怖れられていた酷吏で軍事長官として名高い人物であった。¹⁹²⁾射撃の的として偶人が具体的な人物を指し、弓や矢が、対象を呪い殺そうとする魔術性を具えていた。上記の文献に登場する「偶人」は、俑との関連性が無く、性質上も同一視できない。

(三) 巫蠱用・鍼灸用の「偶人」

漢の武帝は晩年、病の床に伏していた。ある日、怪しい偶人に追われる夢を見たため、大臣の江充に命令し捜査させた。この木製の偶人は呪術の「魔鎮の術」の道具であるとされ、皇宮の近苑や官邸から発見され、巫蠱事件へと発展した。前述の偶人射撃も呪術関連であり、内在的な共通点があると思われる。後漢・班固著『漢書』には漢武帝について、「是時、上春秋高、疑左右皆為蠱祝詛、有興亡、莫敢訟其冤者。〔江充〕充既知上意、因言宮中有蠱氣、先治後宮希幸夫人、以次及皇后、遂掘蠱於太子宫、得桐木人。太子懼不能自明、收充〔江充〕、自臨斬之。(その時、皇帝は高齢で、周りの皆が巫蠱で自分を呪っているのではないかと疑い、世が乱れたが、冤罪と訴える者はいなかった。江充は既に皇帝の意を知り、宮中に蠱氣あることを告げ、まず後宮の希幸夫人を制圧し、その後皇后にまで及び、遂に太子宫で蠱を掘り、桐製偶人を得た。太子は恐ろしさのあまり弁明できず江充を逮捕し、自ら彼〔江充〕を斬った。))」と記述されている。¹⁹³⁾「蠱祝詛」、「蠱氣」などは毒虫を使う呪術であるが、「掘蠱」はその虫類を掘り出すということではなく象徴的な意味であり、その後の「得桐木人」が最も強調したいことである。武帝の信頼を受けていた江充は元々医術に精通し、上意に徹することで事件の中心人物となったが、その意を発したのは武帝本人である。彼は晩年において、生涯における最も大きな悲劇をもたらした。小さな偶人によって引き起こされた死者数万人の惨事であった。李昉編『太平御覧』では、「巫蠱事件」を「江充為桐人、長尺、以針刺其腹、埋太子宫中。充曉医術、因言其事。(江充は桐製偶人を使い、長さは一尺で、針でその腹部を刺し、太子宫の中に埋める。江充は医術に長けていたことから、このような事をしたと言われている。))」と、より詳しく述べている。¹⁹⁴⁾隋、唐二代にわたる李大師、李延寿父子著『南史』に記される「刺芻人(芻人を刺す)」という方法は、巫蠱と酷似している。芻人とは、春秋・戦国時代に言われた芻靈すなわち藁人形のことであり、偶人の一種である。¹⁹⁵⁾

「巫蠱術」は他にも、後漢・王充著『論衡』の中に登場している。「李子長為政、欲知囚情、以

梧桐為人、象囚之形、鑿地為塹、以蘆葦為槨、臥木囚其中。囚罪正、則木囚不動；囚冤侵奪、木囚動出。不知囚之精神著木人乎。將精神之氣動木囚也。(李子長が公務を行い、囚人の状況を知るため、梧桐製の囚人と似た人形を作り、地に穴を掘って、葦で槨を作り、人形を中に寝かせる。断罪が正しければ木製人形は動かないが、冤罪であれば人形が動き出す。囚人の精神が木人に宿っているか、それとも精神的なエネルギーによって木製囚人が動かされるのか。)」¹⁹⁶⁾ 罪状の真偽を確かめるために作った木製囚人に服役者の精神が投影され、偶人が動き出すという内容が記されている。人間精神が対象物と呼応し合っている一種の「天人相関説」のような試みであろう。

北宋・李昉編『太平御覧』には「太子陰作偶人、書帝及漢王姓字、縛手釘心、令人埋華山下、令楊素發之。(皇太子が密かに偶人を造り、皇帝及び漢王の名前を書き、その偶人の手を縛り、心臓部を釘で打ち、華山に埋めるよう命じ、楊素にそれを発掘させた。)」¹⁹⁷⁾とあり、その方法や狙った対象は漢代と酷似している。これは漢代武帝以後に起きた唐代版の巫蠱事件である。鍼灸用、巫蠱用の偶人類はその使い方に重なる部分があり、巫蠱は鍼灸の病人治療目的などの医学手法の悪転用であろう。偶人類の桐木人、桐人、梧桐人、芻人などを埋める際の、「思いを込める」という接点があっても、攻撃性があり、祈念や追悼を目的とするという点で、自衛の意味での鎮墓獸のような道具とも異なっていた。

後漢・班固著『漢書』には「及使人巫祭祠祖上、且上甘泉當馳道埋偶人。(人を派遣し祖先を祭り、甘泉へ赴かせて馳道に偶人を埋める。)」と記されている。顔師古による注釈では「甘泉宮在北山、故欲往皆言上也。刻木為人、象人之形、謂之偶人。(甘泉宮は北山にあり、そこに赴こうとするのを皆『上』と言う。木を彫って人形を作り、人を象っているため、偶人と称される。)」とある。¹⁹⁸⁾ 上記の文献は人形に宗教的意味合いが含まれていることを示している。

前漢文帝か景帝の時期と思われる四川省綿陽市永興鎮双包山2号墓からは、副葬品の黒漆木製の軍人俑、馬彫塑が発見された(1993年)。特に木製漆塗りの「針灸経脈人形」と呼ばれている人体彫刻品に注目したい。朱漆で対称的に各9本の線と、背中に中心線が上下方向に1本の合計19本が描かれている。発見者の見解によれば、「背中の中心線が督脈、両側が手の三陰経と三陽経、および足の三陽経に該当する。」という。¹⁹⁹⁾ このような針灸経脈の偶人は、医学教育のために人体の各経絡けいろくを示す模型である。

(四) 演出用、玩具用の「偶人」

演出用の偶人であれ玩具用の偶人であれ娯楽用の一道具という共通の性格があり、使用されるようになったのは春秋・戦国時代である。列子著『列子』には、「偃師謁見王、王薦之曰、若與偕來者何人邪。対曰、臣之所造能倡者。穆王驚視之、趣步俯仰、信人也。(偃師が王に謁見した際、連れてきたのは何者かと王に聞かれた。それに対し、臣が造った歌舞のできる偶人であると答えた。穆王が驚いて見ると、速くもゆっくりも動く事ができ、下向きにも仰向きにもなり、まるで真人のようであった。)」と記されている。これが現段階で確認されている演出用の操り人形に関する最も早い記載である。²⁰⁰⁾

前漢・賈誼著『新書』には「少閑擊鼓、舞其偶人。昔時乃為戎楽。(僅かな閑を得れば太鼓を打ち、偶人を舞わせた。昔は戎〔遊牧民族〕の娯楽であった。)」とある。²⁰¹⁾ 後漢・応邵著『風俗通義』から引用された一節には「時京師賓昏嘉会、皆作魁壘、酒酣之後、続以挽歌。傀儡、葬家之楽。挽

歌執拂相偶和之者。(当時、都では盛大な宴会が開かれ、その際に魁壘を登場させ、心ゆくまで酒を飲み挽歌を歌った。魁壘を扱うことは、喪葬における儀式であった。蠅拂を握り挽歌を歌い操り人形を披露した。)」とある。²⁰²⁾

唐・段安節著『楽府雜錄』において、漢の高祖劉邦が匈奴の首領冒頓によって平城白登山を包囲されたが、謀臣陳平は美女に似せて作った傀儡人を楼上にて軽快に舞わせることで兵を撤退させ、その包囲を解いたと記されている。²⁰³⁾ この説は漢代当時の文献には見られないが、少なくとも唐代の人々は高度な表現力を持つ傀儡人を操ることで、相手を迷わせる効果があるという認識を持っていた。

西晋・陳寿著『三国志』には「羽偽降、立幡旗為象人於城上、因遁走。(関羽が偽りの降伏をし、城楼に幡旗を人間が居るように見せかけて立たせることにより〔城から〕逃げ出していった。)」とある。²⁰⁴⁾ 唐・段安節著『楽府雜錄』や晋代の『三国志』は同じく、「為象人於城上」との視力の制限を利用して城壁外の敵軍を欺いたとしている。

唐・杜佑著『通典』には次のような記述がある。「窟儡子亦傀儡子、作偶人。(窟儡子は傀儡子とも言い、偶人と見做す。)」偶人の別称には窟儡子、傀儡子などがあり、歌舞を演出する類の偶人であったと思われる。²⁰⁵⁾ 五代の後晋・劉昫著『旧唐書』「音楽志」にも「窟礪子、亦云魁礪子。作偶人以戲、善歌舞。本喪家樂也、漢末始用之於嘉会。(窟礪子は、また魁礪子とも言う。偶人を作り遊戲をし、歌舞に巧みである。元々は葬式で傀儡つまり傀儡(操り人形)を使った樂舞がなされたが、漢代末期から宴会用として使われるようになった。)」とある。²⁰⁶⁾ また、明・劉若愚著『明宮史』にも「水傀儡」が登場する。²⁰⁷⁾ 傀儡類の偶人は、挽歌用から祝宴用として、その用途が転化したことが分かる。この操り人形の役割や構成については想像できるものの、実物が無かったため長い間不明であった。脚光を浴びたのは前漢時代、山東省萊西県岱野の木椁墓から発見されたいわゆる「大木偶」と呼ばれるものである(1978年)。発掘報告によれば「全身の関節を動かし、立つこと、座ること、跪くことができる。)」とされている。²⁰⁸⁾ この「大木偶」の報告書の陳述文字は、「傀儡人」との共通点が多い。その機動性の他、193 cmという高さも特徴の一つである。

また、陝西省咸陽市陽陵の裸体俑も、陶製の胴体に木製の可動式の腕が取り付けられている。漢代においてこのような動かせる俑が試行されていた貴重な事例である。²⁰⁹⁾ 舞台演出用ではないが、機動式との点で一致性を備えている。

玩具類に関しては、南朝時代の広西自治区恭城県新街長茶地3号墓から滑石刻像十三体が出土している(1974年)。人像一体を除き、全て豚や馬などの



〔漢〕陝西省咸陽市・可動式俑

家畜類である。高さが4.5～6.3 cmの小型でいずれも玩具類と考えられ、副葬品への転用と考えるも良からう。²¹⁰⁾ また宋代の蘇州、鎮江、杭州あたりの江南地域の墳墓から、子供の姿を象った陶製の像が出土している。元々玩具であったが墓に入れることで故人への追悼を意味しており、亡くなった人間に遊んでもらうとの意図が含まれているものと考えられる。他の俑類の効用と変わらず、俑への性質的「転身」とも考えられる。以上(一)から(四)に挙げられる「偶人」は一部曖昧なものもあるが人像であっても俑の性質にそぐわない。

(五)「俑」意味の「偶人」

以下に、文献に実際に記述のある、俑と関連する偶人の例を挙げる。

前漢・桓寛著『塩鉄論』の「桐馬、偶人彌祭。(桐製の馬、偶人で祭祀する。)」²¹¹⁾

前漢・劉安著『淮南子』の「魯以偶人葬。(魯地で偶人によって副葬する。)」²¹²⁾

後漢・班固著『漢書』の「古人用以事神及送死皆木偶人、木偶馬。(古人が祭祀を行う、及び死者を送るのに、木製の偶人、木製の馬を用いる。)」²¹³⁾

後漢・王符著『潜夫論』の「今京師貴戚、郡県豪家、生不極養、死乃崇葬、…多埋珍宝、偶人車馬。造起大塚、広種松柏。(今日都の王侯貴族、郡県の豪族たちは、生前極めて栄華な生活を送り、死後も人目を引く葬儀を行なわぬ者はない。…多くの珍宝や偶人及び車や馬の模型が埋葬される。大規模な墓の周囲には、松柏を植える。)」²¹⁴⁾

後漢・王充著『論衡』の「丘墓閉藏、穀物乏匱、故作偶人以侍屍柩。(墳墓が閉ざされ、穀物が不足となるため、偶人を造り屍柩〔棺桶しきゅうにいる死者〕に奉仕させる。)」²¹⁵⁾

唐・杜佑著『通典』の「其百官之制、…当野、祖明、地軸…、偶人、其高各一尺。(其の百官に関する規制として、…当野、祖明、地軸…偶人などの副葬品は、其の高さを各々一尺にする。)」²¹⁶⁾

五代・劉昫著『旧唐書』の「王公百官競為厚葬、偶人象馬、彫飾如生、徒以眩耀路人。(王公貴族及び身分の高い役人は、競って厚葬を行っている。副葬品の偶人や馬を作って、まるで生きているように飾り、これをもって道行く人へ誇示する。)」などである。²¹⁷⁾

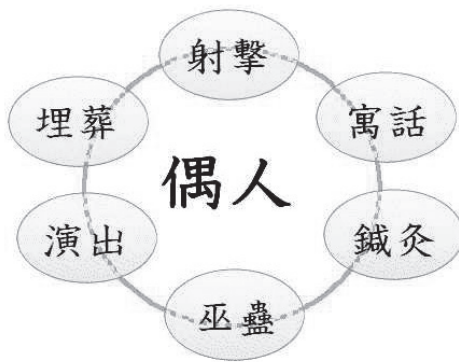
また北宋・李昉編『太平御覧』には「俑、偶人也。」とあり、これは俑と偶人を直接結びつけている例である。同時代の蘇軾著『東坡志林』には「蜀人為一墳而異藏、其間為通道、…以偶人被甲執戈、謂之壽神以守之。(蜀の人〔夫婦〕の埋葬は一つの墳墓に異なる部屋を設け、その間に通路を造り、…偶人に鎧甲を被せて戈を持たせ、寿神と呼んで墓室を守らせ、さらに石甕で通路を塞ぐ。)」とある。²¹⁸⁾

元・陳皓著『集説』では、「中古為木偶人、謂之俑。(中古の時代に、木で作った偶人が使用され、これを俑と呼んだ。)」とされている。

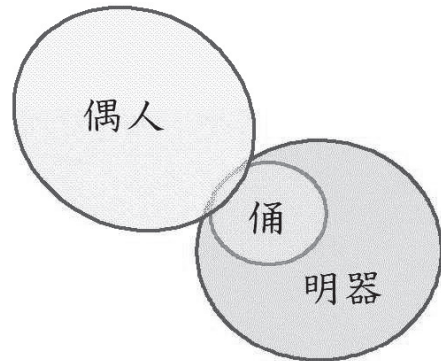
民国時代になっても、「土偶」、「偶人」という言葉が依然として俑の代わりに使われていた。魯迅が北京で俑を収集した際には、「下午同裘子元往松雲閣買土偶四枚、共泉五元。(午後、裘子元と一緒に松雲閣に行き、土偶を四体買う、合わせて五元であった。)」(1923年4月18日)、「午後往松雲閣、置持畚偶人一枚、泉二。(午後、松雲閣に行き、畚ふごを持つ偶人を一体を買う、二元であった。)」(1924年8月22日)と日記に書き留めている。²¹⁹⁾ 魯迅の購入した土偶、偶人は「俑」であることが明白であり、発表された写真や魯迅の故居にある実物とも照合されている。

以上の劉安、王符、王充、杜佑、劉昫、李昉、蘇軾、陳皓、魯迅の述べた「偶人」は、現在使用されている俑の定義と一致しており、俑の別称として「偶人」が使われていたことが分かる。

「偶人」という言葉は複数の対象を表していることから、一概に論ずることはできない。寓話中、または射撃用、巫蠱用、鍼灸用、演出・玩具用、埋葬用の偶人に、観賞用の工芸品、遊戯用の玩具類の偶人等を加えればさらに大きな語群となり、多くの人体造型工芸品の総称と言える。



語彙「偶人」の対象図



偶人・俑・明器の関係図

六. 俑の定義

地下での奉仕の「役割」が託された偶人は俑である。上記の玩具類のように元々実用品である人体彫刻品が埋葬用に転用されれば、同一空間にある俑と同じ副葬品となる。墳墓から出土した単体人像を、全て「俑」と呼んだところで何の支障も無い。俑の範疇に帰属するかしないかは、その定義に基づくものである。

北宋時代の江蘇省江陰県夏港孫四娘子墓の中にある「供卓」や「靠椅」という木製家具の足部分には人像が釘で打ち付けられており、家具の一部として分離できない構造である。それにもかかわらず、報告書には「侍俑」と表現されている。おそらく人体彫刻品で、墓の副葬品と判断されたのであろう。²²⁰⁾ しかし、俑は埋葬用人体彫刻品であるということ以外に、単体（または独立）の人像であるという二つの基本条件が揃わなければならない。この点は無視できず、器物の家具類に付属する彫刻であれば文様などと同じく装飾と考えてもよからう。俑の範疇を家具の一部まで拡大したのは妥当とは言えない。

俑の定義が既に定められているにもかかわらず、これをめぐって異なる見解がいまだに交わされている。俑の本質に基づいた適切な提案であれば価値があるものの、俑の範疇を無視し、新名詞までが登場しているのは問題であろう。副葬用と単体人像の二つの基本概念に基づいて俑であるかどうかの議論を展開するのが相応しい。これは先学が苦労して模索してきた成果であり、それから離脱しては前進が望めないと考える。

(一)「帛画俑」の提唱

3D (立体) ではない平面的な絵画を俑と呼ぶことができるのだろうか。かつて「楚文化研究会」という日本の学会講壇を通じ、美術史評論家の劉曉路氏は以下の議論を展開した。「湖南長沙の馬王堆三号墓の西壁の『車馬儀仗図』と東壁の『家族生活図』における帛画は、『帛画俑』と言うべきで、それぞれ西壁の帛画を『帛画兵馬俑』、東壁の帛画を『帛画侍従俑』と呼ぶのが合理的である」と主張している（1995年、慶應大学にて）。²²¹⁾ これより遡って、氏の論文には「簡牘と帛画の対応関係は、基本的には認められる。それ故帛画上の人物が絵画上の俑であることは疑いもない。従って帛画俑の概念は成立すべきである」、さらに「二次元の平面造型、すなわち絵画の範疇に

属する俑は存在するか否か。理論上からしてあるべきと言える。俑の概念は単に性質によって決まり、製作材料と表現形式に制限はない。馬王堆三号墓の東西の壁の帛画中の人物は、絹に描写された俑であり、即ち帛画俑である。」と提唱している（1992～95年）。平面造形の帛画を俑と混同し、「帛画俑」という全くの新しい語彙を誕生させようとした。²²²⁾ このように俑の定義を軽視し、同じ性質であれば俑と称しても良いとの主張には賛成しかねる。その理由として第一に、かねてから述べている「俑」字自体が示す中空構造の「甬」字と、人体を表す「人偏」の性質は無視できない。この定義、概念、範疇は変えられないだろう。第二に、立体物を平面物と同一に論じるわけにはいかない。このように厳正に区分しないと、新たな支障を招く恐れがある。氏が着目するのは俑の功用のみのようであるが、素材も軽視できないという点を述べておきたい。俑、帛画が異なる媒体の使用により全く違う表象効果をもたらすことから、素材の選択は芸術が成立するために欠かせない主要条件の一つである。彫刻の外延をいくら広げても平面領域には至ることはなく、同様に帛画の2D様式を立体の範疇に拡大することは不可能であろう。

美学の観点から、劉氏と同様に中国美術史分野の学者であり画家でもある聞立鵬氏による論述を借用する。「工芸技術により芸術美を創造することは、芸術的魅力を見出す一つの要因である。造型芸術は対象物を特定の材料により表現する結果である。従って芸術活動のために選別された材料及び道具の使用によって得た風格も芸術美の一部である。篆刻芸術にとって、金属と石という材料関係は切り離すことができない。木材は土や金属の伝統的な材料のように美感を醸し出す事は難しく、また石罅や大根に彫ったならばどのようなか考えが及ばない。」としている。²²³⁾ この見解からも素材が対象の特徴を見出す上で極めて重要であることが示唆されており、木、土、金属でできた俑、絹でできた帛画を混同させるのは見当外れである。

劉氏が提唱している役割が一緒であれば「帛画俑」という名称が成り立つとの功用論に対し、大きな違和感があると言わざるを得ない。同一の墓から出土した物の文字、図像、彫刻は、同一死者のために選ばれる物だからこそ互いに対応関係があり、全ての副葬品は埋葬者へ奉仕するために用意されたと考えられるが、副葬品としての対応関係という条件のみに傾倒し本来の造形様式が無視されれば、陶器俑、磁器俑、漆器俑、壁画俑、画像石俑、画像磚俑、彫刻磚俑などの「名称」が付されるということか。新たな概念が造り出されることを懸念している。劉氏の主張に則り、これまでの「俑」自体をも彫塑俑、または彫刻俑と呼ぶ日が来るのか。帛画を基点とし俑の「功用」と一致させれば、「俑帛画」という新呼称が生まれるのか。「表現形式の制限に左右されない」と提唱する劉氏の「帛画俑論」はさらに検討する必要がある。

墓室という同一空間に安置される副葬品同士の対応関係があっても、必ずしもすべての副葬品の表現対象や題材が同一の焦点に一致するとは限らない。例えば、長沙馬王堆漢墓における帛画は「墓主が天国に赴く」という将来への願いが表現されるのに対し、俑の構成は歌舞、演奏など生前の娯楽生活を表現したものであり、それは過ぎ去った過去の表現である。その役割さえも同等ではなく性質においても同一視できないのに、素材、造型、表現対象が異なる帛画を無理に俑と結びつけることはできない。今の段階で、こうした根拠不明の新名称の提案は、命名に苦慮している学界に対し、新たな重荷を与えることとなる。

(二) 帛画の方向性

「帛画俑」提唱の不適合性が帛画の方向性との論点からも露呈している。劉氏論文の中で、長沙国の丞相利蒼の子息の三号墓で発見された『車馬儀仗図』を解析し、帛画の方向性について大きく取り上げている。まず、氏は陝西省西安市臨潼区の秦代兵馬俑、江蘇省徐州市獅子山の漢代兵馬俑、陝西省咸陽市楊家湾の漢代兵馬俑を例に挙げ、その顔の向きから「兵馬俑を伴う埋葬は、墓主の死後に陵墓を守るという意図で行なわれたことが容易に推察できる」としている。また長沙馬王堆三号漢墓出土の帛画は「西壁に描かれた人物の向きが左なら、南方である」と主張している。しかし、漢代地図は現代の地図と方向が反対であり、西壁の左向きなら東を指す。長沙市馬王堆墓の地図の『地形図』、『駐軍図』、『城邑図』はいずれも「上南下北」と表示されており、劉氏の方位論に対する立証とはならない。²²⁴⁾

元々絵画の場合、意図的に方向を示すのは稀である。漢代も例外ではなく、漢対匈奴の攻防は明らかに「南北戦争」でありながら、各地出土の画像石からは必ずしも地理関係の漢を南方向、匈奴を北方向とした基準により定めているという形跡が見られない。さらに劉氏は同帛画に「南越国の分裂勢力と長沙国内に存在する可能性のある反乱勢力を監視する意がある」ともしており、その時の敵対情勢に関する陳述として合っているのかもしれない。²²⁵⁾ しかし長沙国内に存在する可能性のある反乱勢力がどの方向に定められていたのかは史書にも記載されておらず、議論の根拠の所在が不明である。劉氏は論文の中で、専ら棺室内の東西両壁に掛けられた『車馬儀仗図』に目を向けているようである。帛画、画像石のようなレリーフは平面的な構成で、左右や上下という位置関係により、東西南北を表現できないわけではないが、同じ墓から出土した棺桶の上部に敷かれたT形帛画に描かれた題材は、軍事題材ではなく「敵対勢力」を警備や撃退する「方向」も存在しないために触れられていない。天を向いているともあるいは地を向いているとも解釈できる。さらに、漆奩の中に収められてた『導引(氣功)図』には多くの人物が描かれており、どちらを向いているのかという方向性は判別できない。

(三) 生前の偶人から死後の俑へ

漢代において皇帝、官吏のための明器提供の官庁として「東園匠」が設置された。²²⁶⁾ 唐代では、漢代から続けて使われた「甄官署(凶肆)」という政府機関によって副葬品が生産されていた。²²⁷⁾

このようなところから提供された埋葬品の中には俑もあった。

一方、前述した玩具類のように生前に使用された実用品が埋葬用品に転用されることで用途上の変化が生じる例もしばしば見られた。このような現象が、孔子、孟子の時代において既に行われていた。「哀哉。死者而用生者之器也、不殆於用殉乎哉。(悲しいことに、死者へ生者の品を使わせるのであって、それでは人を殉死に使うのと、似たことになるではないか。)」という記載から伺い知ることができる。²²⁸⁾

今まで出土した俑の内、特に貴重な玉類、金属類で、実用品から副葬品に転用された可能性がある物は一種の再利用または使用延長と言える。例えば、よく知られる河北省満城県の前漢時代中山靖王

〔漢〕河北省満城県劉勝墓・読書俑



劉勝墓で発見された「維古玉人王公延十九年」の刻銘が入った正座玉製人像是 19 才の誕生日に作られた貴重な記念品で墓主劉勝と極めて高い関連性があり、死亡時埋葬物へと変わったのではないかと推察される。劉勝の死亡年齢（前 113 年、52 才）から、このような若者の姿の像は死者生前の本人をモデルに作られた記念の工芸品と十分に考えられる（1968 年、河北文物保護中心蔵）。

また「長信尚浴、今内者臥、陽信家」などの 65 文字が刻まれている銅製の「長信宮灯」は、劉勝妻の竇綰の祖母竇太后が使用したものであることが確認されている。かつては実用品の照明具だったと思われるが、Robert K.G.Temple（ロバート K.G. テンプル）氏は、不老長寿の薬を作る道具ではないかとの見解を示している。²²⁹⁾ いずれにしても埋葬のために作られた物ではなく、転用であった。また、漢の武帝の茂陵 1 号無名塚の殉葬坑から出土した「鎏金銅馬」は、武帝の姉の陽信長公主がかつて使用した物と判明している。²³⁰⁾ 「欲談老人」、また「四人博戯」と称される前漢時代の甘肅省靈台県傅家溝 1 号墓の銅製俑（1974 年、靈台県文化館蔵）の底部分は広く、全体はほぼ三角形をしており、物を銅の重さで押さえる銅鎮として使われたのではないかと考えられる。²³¹⁾ 同時代の河北省満城県中山靖王劉勝墓から出土された「説唱」俑もその形状からかつての銅鎮として作られた物の副葬品への転用であろう。



〔漢〕河北省満城県劉勝墓・説唱俑

さらに国宝（第一級文物）に指定された後漢時代甘肅省武威県雷台墓の飛燕奔馬像は、副葬のために造られたとは思えない。単体で疾走している馬一頭を主題にしており、同墓の緩々と進行する儀礼風の集団騎馬俑とは表象の意義が異なることが一目瞭然である。その上、高さ 34.5 cm のサイズは一般的な儀礼騎馬俑より大きく、墓主である将軍が生前に愛玩した彫刻とも推測できる。また唐代の陝西省西安市駕坡村の楊思勸墓から出土した二体武士像は「石彫立像」と呼ばれている（1958 年、国家博物館蔵）。この硬質白玉石を用いた完成度の極めて高い異例の彫像は、観賞工芸品から副葬品に転用された可能性があると思われる。²³²⁾

〔唐〕西安市駕坡村楊思勸墓・武士像



〔唐〕西安市駕坡村楊思勸墓・武士像

用いた完成度の極めて高い異例の彫像は、観賞工芸品から副葬品に転用された可能性があると思われる。²³²⁾

実際肉眼でいくら見ても、墓から出土したものの中でどの人体彫刻がかつての実用品であるか、または墓主の為に作られた明器であるかの区別は困難である。彫像に使われた痕跡が残っていれば判別できるが、単に形状や色などが殉葬用の俑像と異なるだけで、発掘や文物研究に携わる者でさえも判別できない例は少なくない。

(四)「人俑」・「馬俑」という名称

1965年、何直剛氏が俑に関わる多くの呼称を整理した「俑名試説」の中で「ここに説明されている俑は、古代において死者と共に埋葬された偶人であり、その他の動物類の明器は含まれていない」と主張している。²³³⁾ その後の20世紀後半には世界考古学界における最も重要な出来事の一つである、秦の始皇帝の兵馬俑が発見された(1974年)。その後も始皇帝陵園内での重要発見が続出し、兵馬俑に関連ある様々な情報が世界中を駆けめぐった。「兵馬俑」の名称はいち早く「Terra-Cotta Warriors and Horses」と英訳された。「Terra-Cotta (テラコッタ)」は、terra + cotta (土を焼いた)の組み合わせで、焼成の陶製品を意味し、人々に素材の「粘土」、完成品の「焼き物」というイメージを与えている。また焼き物の対象である「戦士と馬」といった文字表記は、ローマ字文化圏の人々にとって確かに分かりやすい。「テラコッタ」の概念としては焼きもの全般を意味し、「俑」の意味合いも多少含まれているが、俑の原点である副葬品の性質が反映されていない。

半世紀以上前から動物類の明器として「牛俑」、「馬俑」、「駱駝俑」の呼称がしばしば登場していたが、学術界のみに留まり一般的には知られていなかった。世界考古学界にセンセーションを巻き起こした秦代兵馬俑彫刻が発見された当時、いち早く東アジアで「兵馬俑」の名が使われた。漢字文化圏の人々ならば、「馬俑」という二文字を見れば「墓関連」の「馬の彫刻体」との本質を把握でき、「馬俑」という呼称も簡潔で分かりやすいという理由から一般民衆に受け入れられ、公表とはほぼ同時にその名称も普及していった。しかし、「俑」字には人偏が使われており人像に関するものに限定される。この漢字の成り立ちから、「馬俑」や、また慣習的な「(動物) 俑」という呼称は不合理の部分があるが、既に固定化されており是正することは難しい。

新たに「陶馬」名称の提唱と使用を試みようとしても、名高い秦代「兵馬俑」という名詞が定着している以上、名称変更は容易ではないだろう。おそらく大多数の人々は「俑」が「墓用人像」の専門用語とは思わず、動物彫刻を含む生き物をモデルにして作られた「墓用生命体の模型」と考えたのであろう。つまり「俑」とは墓に埋められた人体彫刻品とは限らないとの認識が、まず先に社会に浸透していった。確かに「將軍・兵士俑」+「陶馬」という表記に比べ、「兵馬俑」の方が格段に分かりやすく鮮明なイメージを伝えられる。「兵馬俑」という単語が社会的に歓迎され、40年以上も用いられてきたことを考えると、これからもこの名称が使用され続けていくと考えられる。

俑の名称の代わりに土偶、象人などの単語も使用されているが、いずれも墓用の「人体彫刻品」の性質を示している。また、俑に関する文字記載にも、直接「人」の字を使う例が多い。前述の清代徐松の著作には、「刻木殿直供五十人、控鶴官、馬、歩軍隊各五百人。(木製彫刻の殿直が五十人、控鶴官、馬、歩軍隊がそれぞれ五百人。)」とある。²³⁴⁾ 「俑」を指す量(助数)詞としては、「体」がより妥当であろうが、「人」を使うことで、人間以外の器物や動物などと分けており、歴代書籍、特に漢代の出土品を記録する遺策の延長である。

「動物俑」という誤った呼称に関して、ここ二十数年、再認識しようとする動向が断続的に表れてきている。墓用の動物類彫刻に対し、「(動物) 俑」という文字表現が減っている傾向がある。それに代わって「陶駱駝」、「陶馬」、「陶○○」などの表示が目立ち、例えば、河北省文安県麻各荘の唐墓から発見された俑類は一律に「陶○○俑」と呼ばれ、動物類の彫刻を「陶儀魚」、「陶駱駝」、「陶牛」、「陶野猪」、「陶虎形獣」、「陶異形獣」、「陶鎮墓獣」などとし、名称の的確性が重んじられ

ている(1977年)。²³⁵⁾

かつて来日した展示品の中には山東省済南市無影山11号墓出土の、互いにお辞儀をする人の姿と鳥器物が混在する「人、霊鳥」鼎がある。「文人、鳥」俑という呼称よりも適切である(済南市博物館蔵)。このように俑の定義によって使い分ける必要性をより多くの学識者が意識するようになれば、「動物俑」などの誤称を無くせるかもしれない。

北朝時代から唐、宋時代まで続いた生肖(干支紀年)俑は、頭部が動物で躯が人間から成り、一般的に俑として認められている。



〔漢〕山東省済南市・人霊鳥鼎

北魏時代と推定される山東省淄博市大武鎮窩托村10号墓の12体の彩色生肖俑は現段階の最も古い実例である(1973年)。²³⁶⁾ 唐代の陝西省西安市韓森寨出土の生肖俑、陶製は動物形態を併せ持つ俑の代表作である(1955年、国家博物館蔵)。²³⁷⁾ 唐代の陝西省礼泉県城北の肅宗建陵内出土の馬、猿首人身生肖(干支紀年)俑2体、石製(1974年、昭陵博物館蔵)、²³⁸⁾ これら干支を表す俑は、死者の誕生年と死亡年が示されるとも考えられ、我々に新たな興味深い研究の課題を与えてくれている。

謝辞

本論文の作成にあたりご指導ご協力を賜りました鶴間和幸先生、蝦名良亮先生に心より御礼申し上げます。

注釈・参考文献

- 1) 羅振玉撰『殷墟書契(殷墟書契前編)』、永慕堂、1913年。
- 2) 羅振玉撰『殷墟書契考釈』、永慕堂、1914年。
- 3) 大村西崖『支那美術史彫塑篇・序文』、国書刊行会、1917年。
- 4) 羅振玉著『俑廬日札』、『国学叢刊』1910年。再刊『雪堂所藏古器物図説』、上海古籍出版社、2013年。
- 5) 孔子、孟子らの「俑不仁論」を参照。主に〔前漢〕戴徳『礼記』「檀弓下第四」と〔戦国〕孟軻『孟子』「梁恵王上」より。
- 6) 〔後漢〕許慎『説文解字』。
- 7) 〔三国・魏〕張揖『埤蒼』。
- 8) 〔南朝・宋〕范曄『后漢書』「五行志」。
- 9) 〔清〕張玉書、陳廷敬ら『康熙字典』。
- 10) 同注6「從用声、余隴切」。
- 11) 同注6
- 12) 中国美術全集編輯委員会『中国美術全集・書法篆刻編1 商周至秦漢書法』、人民美術出版社、1987年12月。
- 13) 同注12
- 14) 裘錫圭「談談隨縣曾侯乙墓的文字資料」、『文物』1979年第7期。
- 15) 〔清〕王筠撰『説文句詁』。
- 16) 〔北宋〕徐鉉『徐曰』。
- 17) 同注6
- 18) 〔三国・魏〕張揖『廣雅』。
- 19) 〔前漢〕劉歆著とされる『周礼』「冬官考工記」鳧氏。

- 20) 楊樹達『積微居小学述林』、1954年、中国科学院出版。1983年、中華書局再版。
- 21) 〔前漢〕戴聖『礼記』「月令」。
- 22) 〔戦国〕呂不韋『呂氏春秋』「仲秋」の「日夜分、則一度量、平權衡、正鈞石、齊斗甬。」
- 23) 同注22。「仲春」の「日夜分、即同度量、鈞衡石、角斗桶、正權概。」
- 24) 〔前漢〕劉安編『淮南子』「本經訓」。
- 25) 〔明〕羅貫中『三国志演義』の「迷喚諸將各分頭循河築起甬道、暫為寨脚。」(第五十八回)。
- 26) 〔前漢〕楊雄撰、〔東晉〕郭璞注『方言』卷三。
- 27) 〔前漢〕司馬遷『史記』「司馬相如列伝」。
- 28) 同注27。「季布欒布伝」。
- 29) 同注27。「周勃世家」。
- 30) 〔戦国〕商鞅『商君書』「墾令」。
- 31) 高亨著、董治安編『高亨著作集林』「商君書注釈」、清華大学出版社、2004年。
- 32) 今でも「甬」と「傭」が混用がしばしば見られる。2004年6月、「唐三彩展・洛陽の夢」がサントリー美術館で開催された。会場外の複製品即売コーナーでは、「甬」が「傭」という文字で書かれていた。
- 33) 〔前漢〕孔安国編『尚書』「周書」「牧誓」。
- 34) 〔春秋〕孔子『論語』「子路」。
- 35) 同注34。「里仁」。
- 36) 同注34。「憲問」。
- 37) 〔後漢〕班固『漢書』「広陵厲王胥伝」。
- 38) 同注24。「繆稱」「説山篇」。
- 39) 同注37。「韓延寿伝」。
- 40) 〔後漢〕王符『潜夫論』「浮修篇」。
- 41) 〔南朝・宋〕范曄『後漢書』「朱暉孫 穆列伝」。
- 42) 〔五代・晋〕劉昫『旧唐書』。
- 43) 〔北宋〕蘇軾『東坡志林』。
- 44) 〔前漢〕劉向『戦国策』「齊策第四」。
- 45) 水野清一、小林行雄『図解・考古学辞典』、1959年初版、東京創元社。
京大東洋史辞典編纂会『東洋史辞典』。1980年初版、東京創元社。
- 46) 鳥居龍藏『南満州に於ける前漢末の遺物』、『国華』第二四一、1910年6月。
- 47) 小林太市郎『漢唐古俗と明器土偶』、一條書院、1947年。
- 48) 「衛輝」は地名で河南省新郷市にある。「漳濱」は漳河沿岸地域である。漳河は海河水系に属し、華北を流れる河で、衛河の支流。「曹瞞」は曹操のことである。「土偶は漳濱曹瞞の墓とされる場所から出土したと伝えられている」とされているが、これは実際のところ北魏時代および北齊時代の役者の墳墓であり、建てられた碑文の内容から埋葬されている人物が曹操ではないことが既に証明されている。
- 49) 同注3。
- 50) 同注37。「韓延寿伝」。
- 51) 〔南朝・宋〕謝靈運『祭古冢文并序』。
- 52) 新疆博物館考古隊「吐魯番哈喇和卓古墓群発掘簡報」、『文物』1978年第6期。
- 53) 湖南省博物館、中国科学院考古研究所「長沙馬王堆一号漢墓」、『文物』1973年第7期。
- 54) 湖南省博物館「長沙馬王堆二、三号漢墓発掘簡報」、『文物』1974年第7期。
- 55) 紀南城鳳凰山一六八号漢墓発掘整理組「湖北江陵鳳凰山一六八号漢墓発掘簡報」、『文物』1995年第9期。
湖北文物考古研究所「江陵鳳凰山168号漢墓」、『考古学報』1993年第4期。
- 56) 甘肅省博物館「甘肅武威雷台東漢墓清理簡報」、『文物』1972年第2期。
- 57) 〔金・元?〕張景文『大漢原陵秘葬經』「盟器神煞篇」。
- 58) 傅永魁、周到「河南省鞏県出土的唐代書名陶俑」、『文物』1965年第5期。
- 59) 同注51。
- 60) 〔戦国〕韓非『韓非子』「顯学」。
- 61) 湯池「秦及西漢時期的彫塑芸術」、『中国美術全集・彫塑篇2・秦漢彫塑』、人民出版社、1985年。
- 62) 同注37。「礼楽志」。
- 63) 同注19。「春官」宗伯。

- 64) 〔戦国〕孟子『孟子』「梁惠王上」。
- 65) 〔戦国〕莊周『莊子』「田子方」。
- 66) 〔清〕周寿昌『漢書注校補』。
- 67) 〔庸〕字関連の前文(本文のp.129)を参照。
- 68) 同注 37。「武五子伝」。(唐)顔師古注。
- 69) 〔三国〕曹操『嵩里行』「關東有義士、興兵討群凶。初期會盟津、乃心在咸陽。軍合力不齊、躊躇而雁行。勢利使人爭、嗣還自相戕。淮南弟稱號、刻璽於北方。鎧甲生蟣虱、萬姓以死亡。白骨露於野、千里無雞鳴。生民百遺一、念之斷人腸。」
- 70) 〔晋〕陸機『泰山吟』。
- 71) 〔漢～晋?〕無名氏「蒿里曲」。
- 72) 〔清〕羅振玉著、張本義主編『羅雪堂合集』、西泠印社出版社、2005 年版。
- 73) 唐金裕「漢初平四年王氏朱書陶瓶」、『文物』1980 年第 1 期。
- 74) 〔晋〕陶淵明『祭程氏妹文』。
- 75) 〔北宋〕高乘『事物紀原』卷四。
- 76) 〔清〕徐松『宋会要輯稿』礼二九。
- 77) 〔明〕『永樂大典』卷八一九九、一九庚、陵に収録される〔金・元?〕張景文『大漢原陵秘葬經』「盟器神煞篇」
「蒿里老人、長五尺九寸、安西北角」。前漢時代の「婁(劉)敬」によって書かれた書籍であるとされているが、実際は婁(劉)敬とは無関係。
- 78) 南京博物院『南唐二陵発掘報告』、文物出版社、1957 年。
- 79) 三上次男等監修『敦煌・西夏王国展』、1988 年、日本経済新聞社。
- 80) 〔北宋〕李昉『太平御覽』。
- 81) 〔清〕俞樾『茶香室叢鈔』。
- 82) 同注 6。
- 83) 〔後漢〕高誘『淮南子注』「纏称訓」。
- 84) 〔前漢〕桓寬『塩鉄論』「散不足篇」。
- 85) 同注 75。
- 86) 〔清〕張玉書『佩文韻府』。
- 87) 〔後漢〕袁康『越絶書』。
- 88) 〔後漢〕班固『白虎通德論』。
- 89) 同注 6。
- 90) 〔北宋〕李昉『太平御覽』。
- 91) 河南省博物館「靈宝張湾漢墓」、『文物』1975 年第 11 期。
- 92) 郭沫若『奴隸制時代』、科学出版社。1962 年。
- 93) 杭德州「長安県三里村東漢墓発掘簡報」、『文物参考資料』1958 年第 7 期。
- 94) 中国科学院考古研究所『洛陽中州路(西工段)』、科学出版社、1959 年。
中国美術全集編輯委員会『中国美術全集・彫塑編 1 原始社会から戦国までの彫塑』、人民美術出版社、1988 年 4 月。
- 95) 蔡運章、梁曉景、張長森『洛陽西工区 131 号戦国墓』、『文物』1994 年第 7 期。
- 96) 同注 6。
- 97) 〔北宋〕王溥撰『五代会要』。
- 98) 湖南省博物館、中国科学院考古研究所『長沙馬王堆一号漢墓』、文物出版社、1973 年。
- 99) 張劍「鎮江出土的宋代陶塑」、『收藏』2010 年第 11 期。
- 100) 同注 53。その数字はいずれも象徴的で、最初から実際の数に合わせようとしなかったとも推測できる。同墓から実際に出土している 104 体の男子、女子「明童」の木製俑より遥かに少なく「男子明童凡六百七十六人、女子明童凡百八十人」には達していない。
- 101) 同注 6。
- 102) 同注 37。「季布伝」。
- 103) 同注 37。「礼楽志第二」。
- 104) 〔前漢〕王褒『僮約』。
- 105) 〔前漢〕趙曄『呉越春秋』卷五。

- 106) 鄭曙斌「馬王堆三号漢墓遣策之明童問題研究」、『考古与文物』2005年第1期。
- 107) 「九亡童」には「元(其)四亡童(①)衣、三亡童皆丹縵之衣、元(其)二亡童(②)衣。『望山楚簡』2-49。
①は「色」の右に「是」。②は「糸」の右に「此」。
- 108) 同注57。
- 109) 同注76。
- 110) 嘉興地区文管会、海寧県博物館「浙江海寧東漢画像石墓發掘簡報」、『文物』1983年第5期。
- 111) 山東省文物考古研究所「臨淄北朝崔氏墓」、『考古学報』1984年第2期。
- 112) 廊坊市文物管理所、文安県文物管理所「河北文安麻各莊唐墓」、『文物』1994年第1期。
- 113) 揚州博物館「江蘇邗江蔡莊五代墓整理簡報」、『文物』1980年第8期。
- 114) 廊坊市文物管理所、文安県文物管理所「河北文安麻各莊唐墓」、『文物』1994年第1期。
- 115) 劉志遠、堅石「川西的小型宋墓」、『文物參考資料』1955年第9期。
陳建中「成都市郊的宋墓」、『文物參考資料』1956年第6期。
- 116) 「南朝・宋」范曄『後漢書』「礼儀志中」には「強梁、祖明共食饑死寄生。」
「唐」魏徵ら『隋書』「礼儀志三」には、「又作窮奇、祖明之類、凡十二獸、皆有毛角、鼓吹令率之、中黃門行之、元从僕射將之、以逐惡鬼於禁中。」と書かれている。
- 117) 王去非「四神、巾子、高髻」、『考古通訊』1956年第5期。
- 118) 「唐」蕭嵩編『大唐開元礼』卷三、序例下「雜制」。
- 119) 「元」トクト(托克托・脱脱)主編『宋史』「礼志二五」。
- 120) 山西省考古研究所、太原市文物管理委員会「太原南郊北齊壁画墓」、『文物』1990年12期。
- 121) 河南信陽地区文管会、光山県文管会「春秋早期黄君孟夫婦墓發掘報告」、『考古』1984年第4期。
- 122) 山西省考古研究所等「太原市北齊婁叡墓發掘簡報」、『文物』1983年第10期。
- 123) 同注78。
- 124) 高桂雲「北京出土青釉紅陶人首四足魚身俑」、『文物』1983年第12期。
- 125) 李振奇等「河北南和長買郭唐墓」、『文物』1993年第6期。
- 126) 辛明偉等「河北南和唐郭祥墓」、『文物』1993年第6期。
- 127) 長治市博物館「山西長治市北郊唐崔擘墓」、『文物』1987年第8期。
- 128) 長治市博物館「山西長治市唐代馮廓墓」、『文物』1989年第6期。
- 129) 揚州博物館「江蘇邗江蔡莊五代墓整理簡報」、『文物』1980年第8期。
- 130) 晋江地区文管会、永春県文化館「福建省永春県発現五代墓葬」、『文物』1980年第8期。
- 131) 福建省博物館「五代閩国劉華墓發掘報告」、『文物』1975年第1期。
- 132) 同注78。
- 133) 四川省博物館、洪雅県文化館「四川洪雅宋墓發掘簡報」、『考古』1982年第1期。「伏地俑」と呼ばれている。
- 134) 彭適凡、唐昌朴「江西発現幾座北宋紀年墓」、『文物』1980年第5期。
- 135) 同注57。
- 136) 王去非「四神、巾子、高髻」、『考古通訊』1956年第5期。
- 137) 「元」トクト(托克托・脱脱)主編『宋史』「礼志二七」。
- 138) 同注57。
- 139) 「明」曹昭『格古要論』に「大食窯出於大食國。以銅作身、用藥燒成五色花者、與佛朗嵌相似。嘗見香爐、花瓶、盒兒、盞子之類。」と書かれている。
- 140) 「清」朱彝尊『日下旧聞考』。
- 141) 長谷川祥子「三彩のやきもの展によせて」、『陶説』565号、2004年4月。日本では、「唐～」という名称が数多く存在している。
- 142) 張文軍「河南省出土の唐三彩における造型と装飾について」、『唐三彩展・洛陽の夢』、朝日新聞社、2004年。
2004年5月からほぼ2か月間、東京サントリイ美術館で開催された「洛陽の夢・唐三彩展」においては、漢代から宋代までの118点を展示し、唐三彩の起源と流れをたどる全体図が詳細に紹介されている。「唐三彩」の名称は「唐」という特定の時期に造られ、また、「三色」であることも示されており、大変明白で、学界のみならず、社会にも認められている。しかし、「命名」については、展示品出品の河南博物院院長は「『唐三彩』という名称が慣用化してしまい、今もこの名称が使われている。」と述べている。
- 143) 「埋葬記録関係類」というのは埋葬記録(リスト)ではなく、文学的描写を中心とする詩文であり、埋葬

場所、墓主なども不明確なものも多い。

- 144)〔明〕『永樂大典』卷八一九九、一九庚、陵に収録される〔金・元？〕張景文著『大漢原陵秘葬經』五〇篇の「明器神煞」篇参照。
- 145)同注 37。「霍光伝」に「賜金錢、綰絮、繡被百領、衣五十篋、璧珠璣玉衣、梓宮、便房、黃腸題湊各一具、椁木外臧椁十五具。」顔師古注「便房、小曲室也。如氏以為榧木名、非也。」
- 146)〔前漢〕毛亨『毛詩』。
- 147)同注 51。
- 148)〔北宋〕歐陽修ら『新唐書』列伝第三十八「唐臨伝」附「唐紹伝」。
- 149)羅振玉『古明器圖録・序文』、1916 年。再刊『古明器圖録』、江蘇古籍出版社、2003 年
- 150)同注 3。
- 151)〔唐代〕杜甫『白帝城最高樓』「扶桑西枝對斷石、弱水東影隨長流（眼前の枝は扶桑の西枝が斷石に対してのように見え、水流の様子は弱水の東影が長流に随うのを見るようだ。）」
- 152)鄧雲鄉『魯迅與北京風土』、文史資料出版社、1982 年 8 月。1923 年 4 月 18 日「下午同裘子元往松雲閣買土偶四枚、共泉五元」。1924 年 8 月 22 日、「午後往松雲閣、置持畚偶人一枚、泉二」。
- 153)同注 21。
- 154)同注 21。
- 155)同注 21。
- 156)同注 21。
- 157)同注 6。
- 158)同注 21。
- 159)同注 44。
- 160)〔戰国〕左丘明『左伝』「昭公十五年」。
- 161)〔南宋〕王厚之『鐘鼎款識』。
- 162)黃錦前「郭莊楚墓出土競氏有銘銅器試釋」、復旦大學出土文獻與古文字研究中心、2012 年 6 月。
- 163)〔春秋〕曾參『大学』。
- 164)〔唐〕李林甫、張九齡等撰『唐六典』「飢官署」。
- 165)〔唐〕谷神子『博異志』「張不疑」。
- 166)同注 42。「輿服志」。
- 167)〔元〕石德玉（石君寶）『曲江池』。
- 168)同注 57。
- 169)同注 57。
- 170)〔唐〕韋述著『兩京新記』。
同注 76。
- 171)同注 21。
- 172)同注 42。「輿服志」。
- 173)徐苹芳「唐宋墓葬中的明器神与墓儀制度」、『考古』1963 年第 2 期。
- 174)羅振玉『古明器圖録』、江蘇廣陵古籍出版社、2003 年 3 月再版。
- 175)鄭德坤、沈維鈞『中国明器』、哈佛燕京社、1933 年 1 月。
- 176)濱田耕作『支那古明器泥象図説（総論）』、桑名文星堂、1925 年初版。
『支那古明器泥象図説』、刀江書院、1927 年再版。
- 177)同注 47。
- 178)徐吉軍・賀雲翱『戰国至南北朝俑及明器模型』『中国喪葬礼俗』、浙江人民出版社、1991 年。これは土を原料としたものが絶対的な数を占めている。その理由は、古人の土に対する愛心というより、土の高い可塑性という特徴と素材が容易に手に入れられたからである。だからこそ、青銅及び鉄の俑は非常に少なかった。
- 179)胡国強『故宮博物院藏品大系（雕塑編 1）戰国至南北朝及明器模型』、
田軍『故宮博物院藏品大系（彫塑編 2）隋唐俑及明器模型』（上）、
田軍『故宮博物院藏品大系（彫塑編 3）隋唐俑及明器模型』（下）、
王金利『故宮博物院藏品大系（雕塑編 4）宋元明俑及明器模型』、紫禁城出版社、2011 年 1 月。
- 180)〔後漢〕許慎『説文解字』。

- 181)〔唐〕司馬貞『索隱』。
- 182)〔南朝・宋〕裴駰『集解』引『漢書音義』。
- 183)同注37。「黥(英)布伝」。(唐)顔師古注。
- 184)〔前漢?〕作者?『爾雅』「釈詁」。
- 185)同注37。「公孫ラ伝」。(唐)顔師古注。
- 186)同注44。「謂孟賞君曰、今臣来、過於淄上。有土偶人、(與桃梗)相與語。桃梗謂土偶人曰、子西岸之土也。挺子以爲人。至歲八月、降雨下、淄水至、則汝殘矣。土偶曰、不然、吾西岸之土也、(吾殘)則復西岸耳。今子東国之桃梗也。刻削子以爲人。降雨下、淄水至、則子漂漂者、将如何耳。(孟賞君が述べた。臣がお館に参ります途中、淄水のほとりを通り過ぎますと、泥人形と桃の木の人形とが互いに語り合っていました。桃の木の人形が泥人形に申しました。『君は元をただせば、この西岸の土だ。君を捏ね固めていかにも人間らしく作ってはいるが、毎年八月の頃ともなつて、大雨が降つて淄水が溢れ出したら、折角の君も元の木阿弥さ』泥人形が申しました。『いや、そうではない。いかにも、僕は西岸の土だ。だが、僕が壊れたら、西岸に帰るだけのことさ。ところが、君は、東国の桃の木でできている人形だ。君を刻んだり削ったりして人間の形にこしらえてはあるが、大雨が降り、淄水が溢れだして、君を流してしまったら、ぶかぶか漂い流れ君は、一体どうするつもりかね。』」。
- 187)〔前漢〕司馬遷『史記』「段本紀」。
- 188)同注44。「燕策第九」。
- 189)同注44。「朱、衛、中山第十」。
- 190)同注188。
- 191)〔南朝・宋〕范曄『後漢書』「齊武王伝」
- 192)〔唐〕司馬貞『索隱』。
- 193)同注37。「江充伝」。同書の「百官公卿表」に「司隶校尉、周官、武帝征和四年初置。」「捕巫蠱、督大奸猾」と記されている。
- 194)同注90。
- 195)〔隋〕李大師、李延寿『南史』「張邵伝」に「秋夫…嘗夜有鬼呻声、甚凄愴、秋夫問何須、答言『姓某、家在東陽、患腰痛、死雖爲鬼、痛猶難忍、請療之。』秋夫曰、『云何厝法』鬼請爲芻人、按孔穴鍼之、秋夫如言、爲灸四處、又鍼肩井三處、設祭埋之。明日見一人謝恩、忽然不見、當世服其通靈」。
- 196)〔後漢〕王充『論衡』「乱龍篇」。
- 197)同注90。「方術部」十六。
- 198)同注37。「公孫ラ伝」。(唐)顔師古注。
- 199)馬繼興「双包山漢墓出土的針灸經脈漆木製人形」、『文物』1996年第4期。
- 200)〔春秋・戦国〕列御寇『列子』「湯問」。
- 201)〔前漢〕賈誼『新書』「匈奴」。
- 202)〔後漢〕応邵『風俗通』。
〔五代・梁〕劉昭注『後漢書』「五行志」。
- 203)〔唐〕段安節『樂府雜録』。
- 204)〔晋〕陳寿『三国志』「呉志」呉主伝。
- 205)同注203。
- 206)同注42。「音楽志」。
- 207)〔明〕劉若愚『明宮史』「木集」。
- 208)煙台地区文物管理組、莱西県文化館「山東莱西県岱野西漢木槨墓」、『文物』1980年第12期。
- 209)陝西省考古研究所漢陵考古隊「陽陵漢—彫塑美のメロディ」、『中国漢陽陵彩俑』、中国・陝西旅遊出版社、1992年。
- 210)広西チワン族自治文物工作隊「広西チワン族自治区恭城県新街長茶地南朝墓」、『考古』1979年第2期。
- 211)同注84。
- 212)〔前漢〕劉安『淮南子』の中で、孔子の「謂爲俑者不仁(俑を扱う者は不仁である)」との字句を解釈するにあたり、「偶人」という言葉が引用されている。「魯以偶人葬、而孔子嘆。見所始則、知其所終…聖人見其所生、則知其所歸矣。」
- 213)〔後漢〕班固『漢書』「韓延寿伝」。
- 214)〔後漢〕王符『潜夫論』。

- 215) 同注 196。「薄葬篇」。
 - 216) 〔唐〕杜佑『通典』卷第八十六。
 - 217) 同注 166。
 - 218) 王雲五主編『蘇東坡集』、台北・商務印書館、1965 年。
馬繼興「双包山漢墓出土の針灸経脈漆木製人形」、『文物』1996 年第 4 期。
 - 219) 鄧雲鄉『魯迅與北京風土』、文史資料出版社、1982 年 8 月。
 - 220) 蘇州博物館「江陰北宋『瑞昌県君』孫四娘子墓」、『文物』1982 年第 12 期。
 - 221) シンポジウム「楚文化研究の現在」、第三回例会の発表より(1995 年、慶應大学)。
 - 222) 劉曉路「帛画諸問題－兼談帛画学構想」、『美術史論』1992 年第 3 期。
劉曉路「論帛画俑－關於馬王堆 3 号墓東西壁帛画的性質和主題」、『考古』1993 年第 4 期。
 - 223) 聞立鵬「動情・凝意・煉形」、『美術研究』1980 年第 4 期。
 - 224) 馬王堆漢墓帛書整理小組「長沙馬王堆 3 号漢墓出土地圖の整理」、『文物』1975 年第 2 期。
吳順東「馬王堆古地圖有関方位問題淺析」、『馬王堆漢墓研究文集』、湖南出版社、1994 年。
 - 225) 劉曉路「從馬王堆 3 号墓出土地圖看墓主官職」、『文物』1994 年第 6 期。「長沙国の兵力は『百万』と称される南越国と比べ、明らかに劣勢となっていた」という推論の根拠は不明である。「長沙国」はあくまでも独立政権ではなく巨大な漢帝国の方国であり、漢政府との軍事力、軍事行動と連動しており、必ずしも劣勢ではなかったようである。
 - 226) 〔後漢〕班固『漢書』「百官公卿表」。
 - 227) 〔北宋〕歐陽脩ら『新唐書』「百官志三」。
 - 228) 同注 21。
 - 229) ロバート K.G. テンプル著、牛山輝代訳『図説 中国の科学と文明』、河出書房新社、2008 年。
 - 230) 漢武帝の茂陵 1 号無名塚の殉葬坑から出土した「鍍金銅馬」は、武帝姉の陽信長公主の所有であったようである。
 - 231) 霊台県文化館「甘肅霊台発見兩座西漢墓」、『考古』1979 年第 2 期。
 - 232) 楊宗榮「唐楊思勗墓的兩件石雕像」、『文物』1961 年第 12 期。
 - 233) 何直剛「俑名試説」、『文物』1965 年第 5 期。
 - 234) 同注 76。
 - 235) 廊坊市文物管理所、文安県文物管理所「河北文安麻各莊唐墓」、『文物』1994 年第 1 期。
 - 236) 山東省文物考古研究所「臨淄北朝崔氏墓」、『考古学報』1984 年第 2 期。
 - 237) 東京国立博物館編「世界四大文明・中国文明展」、NHK、NHK プロモーション、2000 年。
 - 238) 昭陵博物館「唐肅宗建陵出土石生肖像俑」、『文物』2003 年第 1 期。
- 〔前漢〕戴聖『礼記』の日本語訳は、竹内照夫『新釈漢文大系第 27 卷・礼記』（明治書院、昭和 46 年）を引用・参考している。
- 〔前漢〕劉向『戦国策』の日本語訳は、福田襄之介、森熊男『新釈漢文大系第 2 卷・戦国策』（明治書院、昭和 46 年）を引用・参考している。